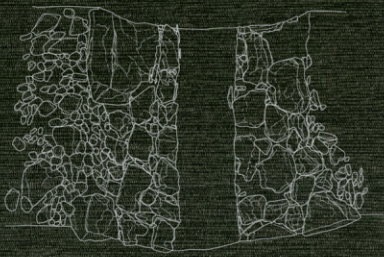
高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第96集

史跡 高知城跡

丸ノ内緑地試掘確認調査報告書



2006.3

高知県教育委員会
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター

史跡　高知城跡

丸ノ内緑地試掘確認調査報告書

2006.3

高　知　県　教　育　委　員　会
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

高知城は毎日散歩やジョギングする人が絶えず，春には花見など多くの県民の憩いの場として親しまれています。また現存する天守閣は全国的にも貴重な文化財であり，毎年県外からの多くの観光客をお迎えしています。

この度NHK大河ドラマ「功名が辻」の放送が決定し，高知県では官民一体となり観光客誘致に取り組んでいます。その一環として博覧会「土佐二十四万石博」が開催されることとなり，その候補地となった高知城内の丸ノ内緑地の発掘調査が行われました。調査では大河ドラマの主人公である土佐藩一代目藩主，山内一豊やその妻千代の時代の遺物が出土しているとともに，絵図に描かれていた高知城に当初あった堀の位置を確認することができました。また，江戸時代後期の大規模な石組みの水路遺構を確認したほか，多くの瓦や陶磁器が出土し，これまで発掘調査が行われていなかった丸ノ内緑地で江戸時代の遺構や遺物が確認されたことは非常に貴重な成果となりました。

多くの人に親しまれている高知城跡での今回の発掘調査の成果が，地域の文化財の理解と歴史学及び考古学，学術研究の発展に寄与することを祈念いたします。

最後になりましたが，調査にあたって多大なご理解とご協力をいただいた，高知市みどり課，高知城管理事務所をはじめとする関係者の方々や発掘調査に従事していただいた方々，地元住民の方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
所長　川村寿雄

例 言

1. 本書は史跡高知城跡丸ノ内緑地地区試掘確認調査の報告書である。
2. 調査は，高知県教育委員会より財団法人高知県埋蔵文化財センターが委託を受け実施した。調査面積は300㎡，調査期間は平成17年5月16日から8月15日であった。
3. 丸ノ内緑地は史跡高知城内に位置し，高知市の所有地である。
4. 発掘調査は以下の体制で行った。

   総　　括：財団法人埋蔵文化財センター所長　川村寿雄
   総　　務：同次長兼総務課長　湯浅文彦
   調査総括：調査課長　森田尚宏
   調査担当：調査員　筒井三業，徳平涼子

5. 本書の執筆・編集は徳平が行った。現場写真は筒井，徳平が撮影し，遺物写真は徳平が撮影した。なお，染付の実測図作成については埋蔵文化財センター廣田佳久に協力を得た。
6. 遺構については，各トレンチごとに通し番号とし，SA(塀・柵列跡)，SK(土坑)，SD(溝跡)，P(ピット)等の略号も使用した。掲載している挿図の縮尺はそれぞれに記載しており，方位Nは世界測地系によるGNである。
7. 遺物については縮尺1/3を基本とし，一部の遺物については，1/2(古銭等)，1/5(大型の陶器，磁器等)，1/6(瓦等)に縮尺を変えているが，各挿図にはスケールを表示している。遺物番号は通し番号とした。
8. 発掘作業，整理作業は下記の方々に行って頂いた。また，同センター諸氏，浜田恵子氏(高知市教育委員会)から貴重な助言を頂いた。記して感謝する次第である。

   発掘調査：測量補助員　渡辺暁子，作業員　尾崎定富，白井三郎，杉本直助，町田憲嗣，山口優幸
   整理作業：整理作業員　村永理恵

9. 調査にあたっては，高知県教育委員会，高知市みどり課，高知城管理事務所にご協力を頂いた。また，地元住民の方々に遺跡に対する深い御理解とご援助を頂き，厚く感謝の意を表したい。
10. 出土遺物は「05－4KM」と註記し，高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　調査の契機と経過
1．契機と経過 …… 1
2．調査の方法 …… 1
3．調査の概要 …… 1
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境
1．地理的環境 …… 3
2．歴史的環境 …… 3
3．高知城跡の沿革 …… 5
4．丸ノ内緑地の沿革 …… 5
第Ⅲ章　調査の成果
1．TR－1 …… 7
2．TR－2 …… 8
3．TR－3 …… 11
4．TR－4 …… 12
5．TR－5 …… 15
6．TR－6 …… 20
7．TR－7 …… 27
8．TR－8 …… 30
9．TR－9 …… 40
10．TR－10 …… 43
11．TR－11 …… 44
12．TR－12 …… 47
13．TR－13 …… 49
14．瓦について …… 51
第Ⅳ章　考察
1．丸ノ内緑地の変遷 …… 57
2．土手状遺構について …… 58
3．まとめ …… 59

挿図目次

Fig. 1　高知城跡位置図 …… 1
Fig. 2　丸ノ内緑地位置図(S=1/25,000) …… 1
Fig. 3　トレンチ設定図及び基準点位置図(S=1/1,000) …… 2
Fig. 4　高知城跡周辺遺跡分布図(S=1/50,000) …… 4
Fig. 5　TR－1出土遺物実測図(磁器) …… 7
Fig. 6　TR－1杭列検出状態 …… 7
Fig. 7　TR－1南壁セクション図 …… 8
Fig. 8　TR－2南壁セクション図 …… 9
Fig. 9　TR－2第XV層出土遺物実測図(陶器・磁器) …… 10
Fig.10　TR－2遺構平面図 …… 10
Fig.11　TR－3北壁セクション図 …… 11
Fig.12　TR－3遺構平面図 …… 12
Fig.13　TR－4北壁セクション図 …… 12
Fig.14　TR－4堆積層出土遺物実測図(磁器) …… 13
Fig.15　TR－4遺構平面図 …… 13
Fig.16　TR－4　SD－1セクション図 …… 14
Fig.17　TR－4　SD－1出土遺物実測図 …… 15
Fig.18　TR－4石列1セクション図 …… 15
Fig.19　TR－5北壁セクション図 …… 16
Fig.20　TR－5堆積層出土遺物実測図(青花・陶器・銅製品) …… 16
Fig.21　TR－5遺構平面図 …… 17
Fig.22　TR－5　SK－1 …… 17
Fig.23　TR－5　SK－1出土遺物実測図 …… 18
Fig.24　TR－5瓦溜まり1出土遺物実測図 …… 19
Fig.25　TR－6西壁セクション図 …… 20
Fig.26　TR－6堆積層出土遺物実測図(土師質土器・陶器・磁器・瓦・土製品) …… 21
Fig.27　TR－6下層遺構平面図 …… 22
Fig.28　TR－6上層遺構平面図 …… 23
Fig.29　TR－6　SX－1，SK－1出土遺物実測図 …… 23
Fig.30　TR－6　SD－1 …… 24
Fig.31　TR－6瓦溜まり1出土遺物実測図1 …… 25
Fig.32　TR－6瓦溜まり1出土遺物実測図2 …… 26
Fig.33　TR－7東壁セクション図 …… 28
Fig.34　TR－7堆積層出土遺物実測図(陶器・磁器) …… 28
Fig.35　TR－7遺構平面図 …… 29
Fig.36　TR－7　SD－2 …… 30
Fig.37　TR－7　SD－1・2出土遺物実測図 …… 30
Fig.38　TR－8南壁セクション図 …… 31
Fig.39　TR－8堆積層出土遺物実測図(土師質土器・陶器・磁器・土製品・古銭) …… 32
Fig.40　TR－8下層遺構平面図 …… 33
Fig.41　TR－8　SK－1 …… 33
Fig.42　TR－8　SK－1出土遺物実測図1 …… 34
Fig.43　TR－8　SK－1出土遺物実測図2 …… 36
Fig.44　TR－8　SK－3セクション図 …… 37
Fig.45　TR－8　SD－1セクション図 …… 37
Fig.46　TR－8　SK－2・3，SD－1，ピット出土遺物実測図 …… 38
Fig.47　TR－8上層遺構平面図 …… 39
Fig.48　TR－8石列1・2セクション図 …… 40
Fig.49　TR－8石列2セクション図 …… 40
Fig.50　TR－9南壁セクション図 …… 40
Fig.51　TR－9堆積層出土遺物実測図(土師質土器・陶器・磁器) …… 41
Fig.52　TR－9下層遺構平面図 …… 41
Fig.53　TR－9　SK－1 …… 42

Fig.54　TR－9　SK－1，SD－1出土遺物実測図 …… 42
Fig.55　TR－9上層遺構平面図 …… 42
Fig.56　TR－9　SD－1セクション図 …… 43
Fig.57　TR－10北壁セクション図 …… 43
Fig.58　TR－10第Ⅶ層出土遺物実測図（磁器） …… 44
Fig.59　TR－10遺構平面図 …… 44
Fig.60　TR－11西壁セクション図 …… 45
Fig.61　TR－11堆積層出土遺物実測図（須恵器・土師質土器・陶器・磁器） …… 46
Fig.62　TR－11遺構平面図 …… 46
Fig.63　TR－11　SD－1 …… 47
Fig.64　TR－12西壁セクション図 …… 48
Fig.65　TR－12遺構平面図 …… 49
Fig.66　TR－12出土遺物実測図（東播系須恵器・瓦質土器・陶器・瓦） …… 49
Fig.67　TR－13西壁セクション図 …… 50
Fig.68　TR－13出土遺物実測図（土師質土器） …… 50
Fig.69　TR－13遺構平面図 …… 51
Fig.70　軒瓦実測図 …… 52
Fig.71　旧堀推定位置図（S=1/1,000） …… 59

表目次

Table.1　TR－8　SK－1土師質土器法量表 …… 35
Table.2　軒丸瓦観察表 …… 51
Table.3　軒平瓦観察表 …… 53
Table.4　出土瓦刻印表1 …… 54
Table.5　出土瓦刻印表2 …… 55
Table.6　出土瓦刻印表3 …… 56

図版目次

PL.1　TR－1南壁セクション（北東より）
TR－4　SD－1検出状態（東より）
PL.2　TR－4　SD－1完掘状態（東より）
TR－6　SD－1完掘状態（東より）
PL.3　TR－7遺構完掘状態（北より）
TR－8下層遺構完掘状態（東より）
PL.4　TR－9下層遺構完掘状態（東より）
TR－10遺構完掘状態（西より）
PL.5　TR－12遺構完掘状態（南より）
TR－13遺構完掘状態（南東より）
PL.6　調査前風景1（南東より），調査前風景2（北西より），TR－2遺構検出状態（東より），TR－2南壁セクション（北東より），TR－3遺構完掘状態（北より），TR－3北壁セクション（南西より），TR－4　SD－1セクション（北より），TR－4　SD－1陶器（10）出土状態（西より）
PL.7　TR－4石列1検出状態（南西より），TR－4北壁セクション（南より），TR－5遺構完掘状態（西より），TR－5　SK－1（南より），TR－5　SK－1遺物（23・24）出土状態（西より），TR－5北壁セクション（南東

より)，TR－6瓦溜まり1検出状態(北より)，TR－6　P－1礎板検出状態(東より)
PL.8　TR－6下層遺構完掘状態(北より)，TR－6　SX－1炭化物・鉄滓出土状態(北より)，TR－7　SD－1(北より)，TR－7　SD－1セクション(東より)，TR－7　SK－1セクション(西より)，TR－7東壁セクション(西より)，TR－8上層遺構検出状態(東より)，TR－8石列1・2検出状態(北より)
PL.9　TR－8石列1･2セクション(西より)，TR－8　SK－1(南より)，TR－8　SK－1セクション(東より)，TR－8　SK－1土師質土器(90)出土状態(南より)，TR－8　SK－1遺物(105・107)出土状態(南より)，TR－8　P－2陶器(116)出土状態(西より)，TR－9上層遺構検出状態(東より)，TR－9南壁セクション(北東より)
PL.10　TR－10北壁セクション(南東より)，TR－11　SD－1(東より)，TR－11土手状遺構検出状態1(南より)，TR－11土手状遺構検出状態2(南より)，TR－12杭出土状態(西より)，TR－12土手状遺構検出状態(南東より)，TR－13杭列検出状態(西より)，TR－13土手状遺構検出状態(南より)
PL.11　陶器(行平鍋)
陶器(土瓶)
PL.12　土製品(フイゴの羽口)
瓦(軒丸瓦)
PL.13　瓦質土器(火鉢)，陶器(灯明受皿・火入れ)，磁器(碗)，瓦(軒丸瓦)
PL.14　青花(碗)，陶器(皿・擂鉢・行平鍋)，磁器(皿・香炉)
PL.15　土師質土器(焜炉)，瀬戸焼(小皿)，陶器(蓋)，磁器(皿・小杯)，土製品(焼台)
PL.16　土師質土器(羽釜)，陶器(皿)，磁器(蓋・碗・皿)
PL.17　須恵器(杯)，青磁(皿)，陶器(甕・火鉢)，磁器(皿)，瓦(軒平瓦)
PL.18　土師質土器(杯・皿・小皿)，青花(皿)，磁器(紅皿)，土製品(泥面子)
PL.19　東播系須恵器(片口鉢)，土師質土器(杯・皿)，瓦質土器(擂鉢)，陶器(碗・皿)，瓦(軒平瓦)，古銭(聖栄元寶)

第Ⅰ章　調査の契機と経過

1. 調査の契機と経過

平成18年の大河ドラマが「功名が辻」に決定し，高知県では官民挙げて観光客誘致と経済の活性化を図るため，博覧会「土佐二十四万石博」の開催が提案され，史跡高知城跡内の丸ノ内緑地が候補地となった。丸ノ内緑地は史跡高知城跡の南東の隅に位置し，古絵図には「侍屋敷」，「御馬場」などの記述がみられる。現在は公園として整備が行われ，県民の憩いの場となっている。丸ノ内緑地においては，これまで発掘調査は行われておらず，博覧会の候補地となったことを受け，丸ノ内緑地内の遺構の状況を把握することが急務となり，試掘確認調査を実施することとなった。また，博覧会対応に限定した調査に留まらず，今後の史跡整備・活用を視野に入れ，丸ノ内緑地全体の遺構の状況を確認し，基礎資料を得ることも目的として調査が行われた。

Fig.1　高知城跡位置図

発掘調査は高知県教育委員会の委託を受け，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。調査期間は平成17年5月16日～8月15日で，実働61日，調査対象面積は6,921㎡，調査面積は300㎡であった。

2. 調査の方法

丸ノ内緑地内に13箇所のトレンチを設定し，TR－1～13と呼称した。トレンチはバビリオン建設予定である北部を中心に設定し，また，旧の堀の位置を確認するため調査対象地の東端にTR－1～3，南端にTR－11～13を設定した。丸ノ内緑地は多くの人が利用しているため，トレンチの設定は園路と樹木を極力避け，且つ，調査は東と西，南の3回に分けて行い，通路を確保し，丸ノ内緑地の半分は公園として開放した。

調査は公園整備の際の表土や客土，撹乱層，無遺物層は機械力（ユンボ）を導入し，遺物包含層や遺構の調査等は人力で行った。また，調査を行った遺構と遺構面には砂を充填し，養生して埋め戻しを行った。遺物，遺構の測量については丸ノ内緑地内に設置した四級基準点を使用した。

Fig.2　丸ノ内緑地位置図（S＝1/25,000）

3. 調査の概要

高知城跡における発掘調査は三ノ丸や伝下屋敷跡（現裁判所），御台所屋敷跡など十数回に亙って行われているが，丸ノ内緑地内の発掘調査は今回が初めて

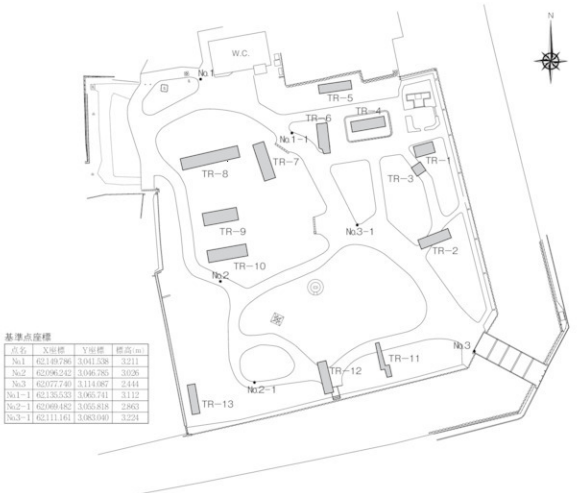


Fig.3　トレンチ設定図及び基準点位置図(S＝1/1,000)

であり，遺構の状況を確認できたことは貴重な資料となった。今回の調査では江戸時代前期と後期の遺構を検出することができた。特に，TR－4で確認した江戸時代後期の石組みの水路遺構は，高知城跡においても比較的規模が大きく，また，TR－6や8でも石組みの水路遺構を確認しており，排水に力を入れていたことが窺われる。なお，宝永年間(1704～1710)の測量図には塀跡とみられる建物が描かれていたが，塀跡の可能性のある柱穴は確認できたものの，今回の確認調査は部分的なものであり明確な建物跡を確認するには至らなかった。しかしながら，一部のトレンチでは江戸時代前期の柱穴や土坑，鍛冶関連遺構などを確認しており，これらの遺構は正保年間の絵図に描かれていた「侍屋敷」の一部に該当する可能性が高い。さらに下層確認トレンチにおいても遺構を確認しており，近世以前の遺構が存在する可能性が高くなった。遺物においても中世の遺物のほか，弥生土器片や須恵器が出土している。

また，丸ノ内緑地の東と南にある堀は，近代に一部が埋め立てられ当初より幅が狭くなっているが，古絵図に描かれていた土手状遺構の一部を検出し，旧の堀の位置を確認した。

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

高知城跡が所在する高知市は高知県中央部に位置し，東を南国市，北を土佐町，西をいの町と春野町に接する。面積264.28㎢，人口約33万人を有し，高知県の政治，経済，文化の中心地であるとともに，中央部の平野を流れる鏡川，久万川，国分川，舟入川，江ノ口川，下田川の各河川が市の南に位置する浦戸湾に注いでいるため，古来より交通の要衝でもあった。北部から西部にかけては標高400～600mの山地が連なり，東部には高知平野が拡がる。現在の平野部は中世頃まではそのほとんどが内海であったが，鏡川の河川堆積や隆起，近世になってからの干拓により現在の状態になっている。そのため中世以前の遺跡については山地や丘陵部に限られ，高知城跡が所在する大高坂山もその小丘陵の一つである。

2. 歴史的環境

旧石器時代の遺物は，高知市東部の高岡原１号古墳より終末期のチャート製細石核が１点発見されている。

縄文時代の遺跡は少なく，長浜のチドノ遺跡から出土した縄文時代前期の下羽島下層式土器片が最古のものであり，後期・晩期では正蓮寺遺跡や柳田遺跡で遺物が出土している。

弥生時代になると遺跡数は増加し，前期末の柳田遺跡や中期の竪穴住居址が確認されている鴨部遺跡などがある。山地・丘陵部ではかろーと口遺跡や城山遺跡，福井遺跡など中期から後期にかけての遺跡がみられる。

古墳時代では前期の古墳は確認されていないが，柳田遺跡で前期初頭の遺物が出土している。中期から後期には愛宕山古墳群や秦泉寺古墳群など高知城跡を取り囲む山麓部に古墳が多く造営されている。高知市西部から南部にかけての丘陵部には，7世紀中葉の横穴式石室をもつ朝倉古墳群や塚ノ原古墳群などがみられる。

古代では白鳳期の瓦が出土する秦泉寺廃寺跡や，その北方にある吉弘遺跡，松葉谷遺跡があり，松葉谷遺跡では土器片や柱穴が確認されており，集落の可能性がある。寺院では，五台山山頂にある古代からの寺院である竹林寺，古代から中世の寺院跡である蓮台寺跡などもみられる。

中世には高知城跡の前身である大高坂城のほか多くの中世城館が築かれる。大高坂城は南北朝期に大高坂山にあった大高坂氏の居城である。戦国時代の高知市周辺は長岡郡本山(現本山町)に拠点をもつ本山氏の勢力下の城跡が多く，朝倉城跡，神森城跡，久万城跡，浦戸城跡などがあげられるが，永禄年間頃に岡豊城の長宗我部氏に破れ，大高坂城をはじめこれらの城跡は長宗我部氏の支配下となる。発掘調査成果としては，浦戸城跡で石垣や瓦が出土しているほか，高知城跡では天正期の石垣や桐文軒丸瓦が出土している。

近世の遺跡としては高知城跡がある。高知城跡では，伝下屋敷などで発掘調査が行われ，多量の陶磁器や瓦，木簡などが出土している。窯跡では高知城跡の北西に土佐藩の陶器を焼いた尾戸窯跡

№	遺跡名	時代	№	遺跡名	時代	№	遺跡名	時代
1	高知城跡（大高坂城跡）	中世～近世	27	石立城跡	中世	53	吉弘古墳	古墳
2	中の谷遺跡	弥生	28	神田ムク入遺遺跡	弥生～中世	54	秦泉寺仁井田神社裏古墳	古墳
3	横内遺跡	弥生	29	シルタニ遺跡	弥生・中世	55	吉弘遺跡	古代
4	福井別城跡	中世	30	神田南遺跡	中世	56	日の岡古墳	古墳
5	福井古墳	古墳	31	ゲシカ端遺跡	弥生	57	松葉谷遺跡	古代～中世
6	高知学園裏遺跡	中世	32	高神遺跡	古墳・古代	58	秦泉寺寒寺跡	古代
7	かろーと口遺跡	中世	33	神田遺跡	弥生～中世	59	秦泉寺別城跡	中世
8	鹿持雅澄邸跡	近世	34	高寒古墳	古墳	60	秦小学校校庭古墳	古墳
9	福井遺跡	縄文～中世	35	久寿崎ノ丸遺跡	弥生～中世	61	愛宕神社裏古墳	古墳
10	高武保宇城跡	中世	36	小石木山古墳	古墳	62	愛宕不動堂前古墳	古墳
11	万ヶ城跡	中世	37	小石木町遺跡	弥生	63	北秦泉寺遺跡	弥生
12	初月遺跡	弥生	38	潮江城跡	中世	64	燕谷古墳	古墳
13	福井西城跡	中世	39	南御屋敷跡	近世	65	秦泉寺城跡	中世
14	福井中城跡	中世	40	中島町遺跡	古墳	66	土居の前古墳	古墳
15	福井元尾城跡	中世	41	尾戸遺跡	弥生	67	前里城跡	中世
16	井口城跡	中世	42	尾戸窯跡	近世	68	桐野城跡	中世
17	杓田遺跡	弥生	43	弘人屋敷跡	近世	69	桐野遺跡	古代
18	加治屋敷跡	古代～中世	44	菅屋町遺跡	古墳	70	一宮別城跡	中世
19	鴨部城跡	中世	45	国沢城跡	中世	71	一宮２号古墳	古墳
20	柳田遺跡	縄文～古墳	46	安楽寺山城跡	中世	72	土佐神社西遺跡	古代～中世
21	鷲治橋付近遺跡	弥生・中世	47	東久万池田遺跡	古代～中世	73	土佐神社	古代～中世
22	船岡山遺跡	弥生	48	西秦泉寺遺跡	古代	74	一宮城跡	中世
23	船岡山古墳	古墳	49	宇津野２号古墳	古墳	75	吸江庵跡	中世～近世
24	能茶山窯跡	近世	50	宇津野１号古墳	古墳	76	五台山法華経塔	中世
25	神田旧城跡	中世	51	宇津野遺跡	縄文	77	竹林寺	古代
26	鴨部遺跡	縄文～近世	52	秦泉寺新屋敷古墳	古墳			

Fig.4　高知城跡周辺遺跡分布図（S＝1/50,000）

があるが，現在は宅地となっている。文政３年(1820)には能茶山磁器窯が開かれたことに伴い，陶製地は能茶山に移された。邸跡では発掘調査が行われたものとして，万葉集の研究で知られる鹿持雅澄邸があり，県史跡に指定されている。寺社跡としては五台山にある吸江庵跡がある。鎌倉時代に臨済宗の道場として開かれ，土佐の中世臨禅宗文化の中心となった。近世に入ると吸江寺として再興されるが，明治初期には廃寺となる。発掘調査により吸江寺に関連する溝状遺構や基壇状遺構などが検出され，近世陶磁器などが出土している。

3. 高知城跡の沿革

大高坂山の城郭の歴史は南北朝期に大高坂松王丸が築いた大高坂城に始まる。暦応３年(1340)の松王丸戦死以後，戦国時代に至るまでの状況は不明であるが，大高坂氏の子孫は続いており，戦国時代には本山氏に属した後，長宗我部氏に従っている。その後，天正16年(1588)には，長宗我部元親が居城を岡豊城から大高坂山に移し，近世城郭と城下町の建設を行うが，天正19年(1591)頃に浦戸城へと再び移転する。

関ヶ原の合戦の後，新しい国主に任命された遠州掛川城主であった山内一豊は，翌年浦戸城に入城する。浦戸は浦戸湾に突き出た要害の地であったものの，領主経営を行う首都としては狭小であり，大高坂一帯に城下町形成を求めた。この地に造営された平山城が現在の高知城(本丸地点の標高44.4m)である。大高坂の地は，南北を鏡川と江ノ口川に挟まれており，慶長年間の築城当時には「河中山」と命名された。しかし城下町建設を進める過程でも度々水害に悩まされており，「高智山」と改め，やがて高知へとなる。築城は昼夜兼行で行われ，慶長８年(1603)に本丸と二ノ丸が完成し，山内一豊が入城した。その後も工事が行われ，慶長16年(1611)に三ノ丸完成をもって終了した。しかし，享保12年(1727)には大火によって大手門ほかを残して大半の建物は焼失する。享保14年(1729)に幕府の許可を得て再建に着手し，延享２年(1745)に二ノ丸，寛延２年(1749)に本丸，宝暦３年(1753)に三ノ丸が完成し，旧状に復した。明治４年(1871)の廃藩置県に伴い高知城は廃城となり，明治政府により本丸と追手門などを残し，ほとんどの建物は解体，撤去が行われ，明治６年(1873)には高知県の管理のもと公園に指定された。

昭和に入ると老朽化や南海地震の影響もあり，改修工事が行われた。昭和26年(1951)には追手門や天守閣，本丸御殿などが国の重要文化財に指定され，また城跡全域は昭和34年(1959)に国史跡として指定を受けた。

4. 丸ノ内緑地の沿革

丸ノ内緑地は高知城跡の南東の隅に位置し，東と南を堀で囲まれている。正保年間(1644～1647年)，慶安４年(1651)の城絵図では現丸ノ内緑地の部分には「侍屋敷」の記述があり，『皆山集』記載の高知城古図には「福岡丹波屋敷」と記されている。寛文９年(1669)の絵中図では「御馬場六十六間」という記述がみられ，馬場として使用されている。宝永年間(1704～1710年)の古絵図には「侍屋敷跡」の記述がみられ，塀とみられる東西に長い建物が描かれているが，この時期には現丸ノ内緑地の辺りはほとんど利用されていなかったようである。その後，安政地震(1855年)の際には藩主及び一族の

避難のため仮御殿が建てられるが，万延元年(1860)には取り除かれ，慶応３年(1867)頃には藩主の令により，鉄砲練兵の稽古が行われている。

明治６年の測量図には「馬場長七十九間半」の記述がみられるが，この測量図は寛永年間の図を元に，測量図を作成し，旧記を付加記入しているものであり，この時期に馬場が存在したかは定かではない。明治維新後には建造物や土手が崩され，明治 11 年(1878)には女子師範学校の校舎が建設，それ以降明治期には警察本署や武徳館，高知県公会堂，農業会館など様々な建造物が造られた。これらの建造物は昭和20年(1945)７月４日の戦災を受けてすべて取り壊された。昭和25年(1950)には丸ノ内緑地を中心に南国高知産業博覧会が開催され，その建物の一つは翌年に高知市中央公民館として開館された。現在は高知市中央公民館は取り壊され，公園として整備されている。

また，正保年間に描かれた城絵図では「土手高一間四尺」という記述があり，堀の内側に土手が存在したことが窺われ，明治初年頃に高知城跡の南西方向から撮影された写真においても土堤が写っており，堀の内側については石垣は築かれていなかったものとみられる。堀についても正保の城絵図には幅 12 間(約 24.0m)と記述されているが，明治７年(1874)には南側，昭和 22 年(1947)には東側の堀の一部が埋め立てられ，現在では東側が約 16.0m，南側が約 14.6m と堀の幅が狭くなっている。

参考文献

高知県教育委員会　1982『史跡高知城跡－保存管理計画策定報告書－』
高知県教育委員会　1994『史跡高知城跡１－高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書－』
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　1995『高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2001『高知城三ノ丸跡－石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書－』
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2002『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集
土佐史談・高知県教育委員会編　2004『高知城下町読本』高知市
山本浮　1927『土佐美術史』高知県教育会
武市佐一郎　1931『高知公園史(續)』(高知県教育委員会　1982『史跡高知城跡－保存管理計画策定報告書－』所収)
岩崎義郎　2001「丸ノ内緑地」『高知城を歩く』高知新聞社
1976『皆山集３』高知県立図書館

第Ⅲ章　調査の成果

層位や遺構と遺物については各トレンチごとに記載している。今回の調査では近世から近代の遺構が確認されている。遺構が多層に亙って検出されているトレンチでは，便宜上，下層検出遺構と上層検出遺構として取り上げ，平面図を作成しているが，各遺構の検出された層位についてはそれぞれに記載している。なお，各トレンチで出土した瓦に関しては一部を除き，後にまとめて記載する。

1. TR－1

TR－1は調査区北東部に設定した東西トレンチで，追手門の南側に位置し，東側の旧の堀の位置を確認するために設置した。現況は花壇であったが，土層は昭和25年に行われた南国高知産業博覧会の際の建物とみられる基礎が残存しており，著しく撹乱と削平を受けていたものの，表土下約2mで土手状遺構の一部を確認し，また，堀を埋めた際に土留めとして使用したとみられる杭列も検出した。

(1) 層序

第Ⅰ・Ⅱ層は花壇に伴う土層，第Ⅲ～Ⅻ層は昭和22年に東側の堀が埋められた際の埋土で，粗粒礫を多く含む。第Ⅻ・ⅩⅠ層は腐植を多く含み，堀を埋める段階で，一度中断があったものとみられる。

第ⅩⅠ～ⅩⅩ層も人為的な層で堀の埋土とみられるが，第Ⅲ～Ⅻ層よりは締まっていた。また，第ⅩⅡ層からは土師質土器片が出土している。

第ⅩⅩⅠ層は土手状遺構となっていた層で，土壌化していた。土師質土器片が出土しており，土手状遺構として使用される以前は生活面であったと考えられるが，遺構は確認されなかった。

第ⅩⅩⅡ～ⅩⅩⅢ層は自然堆積層である。第ⅩⅩⅢ層の東側部分は堀の底土となっていたとみられ，撹乱を受けており，また，青灰色に変色する。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅸ層出土遺物

磁器(Fig.5－1)

1は小丸形の碗で，口縁部の約1/4が残存し，口径8.8cmを測る。全面に光沢のある透明釉を施し，口縁端部は口銹風に茶色を呈する。外面には草花文，口縁部内面には割花菱文の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

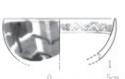


Fig.5　TR－1出土遺物実測図(磁器)

(3) 検出遺構

① 杭列(Fig.6)

第ⅩⅡ層中で検出した杭列で，土手状遺構に平行して南北方向に3列走る。杭は径約4cmを測り，木材は松などの雑木で，腐って痕跡のみ残るものもあったが，長いものは残存長0.7mを測り，先端を細く加工していた。杭列は検出長1.2～1.3mを測り，0.3～

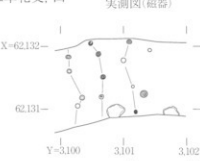


Fig.6　TR－1杭列検出状態

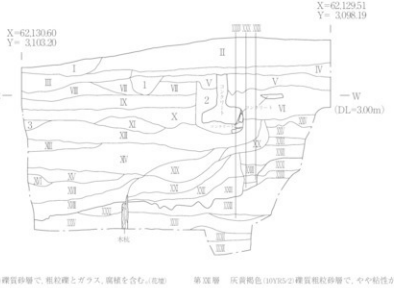


Fig.7　TR－1南壁セクション図

0.5m間隔で3列が確認された。また，第Ⅻ層と第Ⅻ～ⅩⅢ層は杭列を境として堆積土が異なっており，この杭列は堀を埋める際に土留めとして使用されたとみられる。

②土手状遺構

トレンチの西端で確認した第ⅩⅢ・ⅩⅣ層で，東側が人為的に切られる。基底部はほぼ直立して立ち上がり，上部は削平されたものとみられ，高さ0.58mが残存する。

2. TR－2

TR－2は調査区東部に設定した東西トレンチで，TR－1の南約20mに位置する。TR－1同様，東側の旧の堀の位置を確認するために設置したが，上層は著しく撹乱を受けており，土手状遺構は確

認されなかった。またTR－1と同様な杭列を検出したほか，トレンチ西部ではピットなどの遺構を検出した。

(1) 層序

第Ⅰ・Ⅱ層は花壇・園路に伴う土層である。

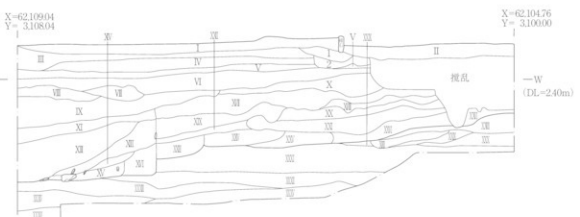
第Ⅲ～ⅩⅠ層は昭和22年に堀を埋めた際の土層である。第ⅩⅡ層は腐植を多く含み，TR－1と同様に堀を埋める段階で中断があったとみられる。第ⅩⅤ層は堀理土の最下層で，瓦が多量に廃棄されていた。

第ⅩⅥ～ⅩⅩ層は土壌化しており，遺物が出土している。

第ⅩⅩⅠ層以下は自然堆積層である。

(2) 堆積層出土遺物

第ⅩⅡ層から土師質土器片，第ⅩⅤ層からは弥生土器片，須恵器片，土師質土器片，白磁片，青磁片，近



層序

第Ⅰ層　明黄色(10YR7/6)礫質細粒砂層

第Ⅱ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質砂層で，上部に中粒礫が堆積する。

第Ⅲ層　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト層で，粗粒礫を含む。

第Ⅳ層　褐灰色(10YR4/1)砂質シルト層で，上部に中粒礫が堆積する。

第Ⅴ層　灰色(5Y5/1)砂質礫層で，極粗粒砂と中粒～粗粒礫を含む。

第Ⅵ層　灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粗粒砂層で，中粒～粗粒礫を含む。

第Ⅶ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質粗粒砂層で，中粒～極粗粒礫を含む。

第Ⅷ層　にぶい黄褐色(10YR6/3)礫質粗粒砂層で，中粒～極粗粒礫を含む。

第Ⅸ層　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト層で，中粒砂と中粒～極粗粒礫を含む。

第Ⅹ層　にぶい黄褐色(10YR7/2)礫質細粒砂層で，粗粒砂と中粒～粗粒礫を含む。

第ⅩⅠ層　灰色(5Y5/1)砂質シルト層で，中粒砂と中粒礫，マンガンを含む。

第ⅩⅡ層　黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト層で，細粒砂と中粒礫，炭化物を含む。

第ⅩⅢ層　黒褐色(10YR3/1)礫質細粒砂層で，粗粒礫と腐植を含み，炭化物を非常に多く含む。

第ⅩⅣ層　褐灰色(10YR5/1)砂質礫層で，極粗粒砂と極粗粒礫～大礫，腐植を含む。

第ⅩⅤ層　黄灰色(2.5Y5/1)極粗粒砂層で，細粒～中粒礫を含む。

第ⅩⅥ層　灰色(5Y5/1)砂質礫層で，極粗粒砂と中粒～粗粒礫を多く含む。

第ⅩⅦ層　にぶい黄褐色(10YR7/3)礫質粗粒砂層で，中粒～粗粒礫を含む。

第ⅩⅧ層　褐灰色(10YR6/1)砂質礫層で，極粗粒砂と中粒礫を多く含む。

第ⅩⅨ層　にぶい黄褐色(10YR5/3)礫質中粒砂層で，中粒～極粗粒礫を含む。

第ⅩⅩ層　灰白色(10YR7/1)シルト層で，細粒礫を含む。

第ⅩⅩⅠ層　灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト層で，粗粒砂と細粒～中粒礫を含む。

第ⅩⅩⅡ層　灰白色(10YR7/1)礫質極粗粒砂層で，中粒～粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅢ層　黄灰色(2.5Y6/1)礫質細粒砂層で，細粒砂～極粗粒砂と中粒～粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅢ層　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト層で，中粒砂と中粒～粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅣ層　にぶい黄橙色(10YR7/2)砂質シルト層で，粗粒砂と中粒～粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅤ層　灰白色(2.5Y7/1)砂質シルト層で，細粒砂と中粒礫，マンガンを含む。

第ⅩⅩⅥ層　灰白色(10YR7/1)粘土質シルト層で，細粒礫を少し含む。(遺物包含層)

第ⅩⅩⅦ層　灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト層で，炭化物を含む。(遺物包含層)

第ⅩⅩⅧ層　褐灰色(10YR6/1)粘土質シルト層で，炭化物を含み，一部青灰色に変色する。

第ⅩⅩⅨ層　灰黄褐色(10YR6/2)粘土質シルト層で，細粒礫を多く含む。

第ⅩⅩⅩ層　褐灰色(10YR6/1)粘土質シルト層で，マンガンを含む。

第ⅩⅩⅩⅠ層　灰色(N6/0)粘土質シルト層で，細粒砂を非常に多く含む。

第ⅩⅩⅩⅡ層　にぶい褐色(7.5YR6/3)砂質礫層で，粗粒砂と中粒～粗粒の円礫，マンガンを含む。

第ⅩⅩⅩⅢ層　明青灰色(10BG7/1)礫質細粒砂層で，粗粒砂と中粒礫を含む。

第ⅩⅩⅩⅣ層　暗灰黄色(2.5Y5/2)礫質粗粒砂層で，中粒～粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅩⅤ層　橙色(7.5YR7/6)砂質礫層で，極粗粒砂と細粒～中粒礫，マンガンを含む。

遺構埋土

1. 灰黄褐色(10YR5/2)礫質砂で，中粒～粗粒礫を含む。

2. 明黄褐色(10YR7/6)細粒砂で，中粒～粗粒礫を含む。

Fig.8　TR－2南壁セクション図

世陶磁器，第Ⅲ層から弥生土器片，土師質土器片，瓦質土器片，青磁片，第Ⅲ層から土師質土器片，青磁片が出土しており，第Ⅳ層から出土した以下の遺物が図示できた。

第Ⅳ層出土遺物

陶器(Fig9－2・3)

2は唐津焼の皿で，底部が完存し，底径4.4cmを測る。底部は削り出し高台で，調整は回転ナデである。内面と外面の高台付近まで灰釉を薄く施す。見込と畳付には砂目痕が3箇所みられる。胎土はやや密で，焼成は良く，釉調は明オリーブ灰色，生地は灰黄色を呈する。3は備前焼の擂鉢で，口縁部の約1/5が残存し，口径31.6cmを測る。口縁部は直立し，器壁は比較的厚く，顎が張り出す。器面には回転ナデ調整を行い，内面には9条単位の放射状と斜め方向の擂り目がみられる。胎土はやや密で，焼成は良く，色調は内面がにぶい赤褐色，外面がにぶい黄褐色を呈する。

磁器(Fig9－4)

4は筒形の香炉で，約1/2が残存し，口径9.0cm，器高4.8cm，底径7.1cmを測る。底部には低い高台が付き，体部はやや内湾して立ち上がり，口縁部は肥厚する。全面に緑釉を施し，高台内の一部を釉ハギする。胎土はやや密で，焼成は良く，釉調はオリーブ灰色，生地は灰白色を呈する。

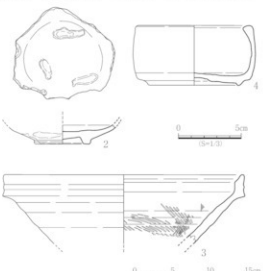


Fig.9 TR－2第Ⅳ層出土遺物実測図(陶器・磁器)

(3) 検出遺構

土壌化していた第Ⅲ層を除去した段階でピット等の遺構が検出された。TR－2では土手状遺構は削平されたものとみられるが，ピット等が検出されなかったトレンチ中央部に存在していた可能性も考えられる。また，第Ⅲ層からは遺物が出土しており，さらに下層には遺構が存在する可能性が高い。

① ピット

P－1

トレンチ南西隅で検出した径28cm，深さ10cmを測る円形のピットである。埋土は褐灰色シルトで，細粒礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが，図示できるものはなかった。

P－2

長径0.54m，短径0.44m，深さ2cmを測る楕円形のピットで，他の遺構に切られる。埋土は褐灰色シルトで，細粒礫を含んでいた。土師質土器片1点

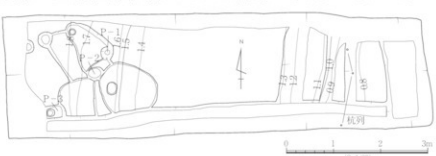


Fig.10 TR－2遺構平面図

が出土したが，図示できなかった。

P－3

隅丸方形を呈するとみられるピットで長辺0.40m，短辺0.29m，深さ4cmを測り，径20cmを測る円形の柱穴を有する。埋土は灰黄褐色砂質シルトで細粒礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点，瓦器片1点が出土したが，図示できるものはなかった。

3. TR－3

TR－3はTR－1の南西に隣接して設定したトレンチで，遺物包含層と遺構を検出した。遺構出土の遺物は細片であり，時期は不明であるが，TR－2で検出されたピットと同じ高さで検出されており，ほぼ同時期と考えられる。また，遺構はTR－1で確認された土手状遺構よりも若干高い位置で検出されているが，検出面は非常に締まった古土壌であり，土手状遺構の内側に存在した遺構であるとみられる。

(1) 層序

第Ⅰ層は園路に伴う整地層である。

第Ⅳ層以下は非常に締まりがあり，TR－1の堀の埋土とは異なり，堀が埋められた昭和22年以前の堆積層とみられる。第Ⅴ層は土壌化しており，遺物包含層である。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅳ層からは軒平瓦，平瓦，桟瓦，第Ⅴ層は土師質土器片，陶器片，鉄滓が出土しているが，図示できるものはなかった。

(3) 検出遺構

第Ⅳ層は瓦が出土したが，遺構は確認されなかった。第Ⅴ層を除去した段階でピット数基が検出された。

① ピット

P－1

長径0.33m，短径0.25m，深さ2cmを測る楕円形のピットで，埋土はにぶい黄褐色シルトで浅黄橙色砂質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが，図示できなかった。

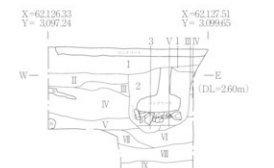


Fig.11　TR－3北壁セクション図

P－2

長径0.43m，短径0.31m，深さ2cmを測る楕円形のピットである。埋土はにぶい黄褐色シルトで浅黄橙色砂質シルトのブロックと細粒礫，炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが，図示できなかった。

P－3

径0.36m，深さ5cmを測る円形のピットである。埋土は褐灰色砂質シルトで細粒礫，炭化物，マンガンを含んでいた。出土遺物には平瓦片1点がみられたが，図示できなかった。

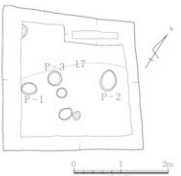


Fig.12　TR－3遺構平面図

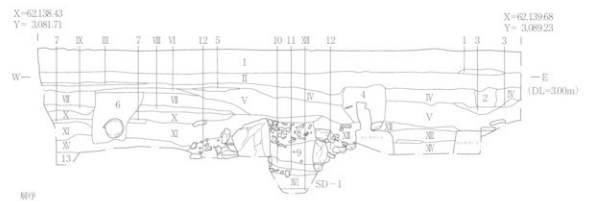
4. TR－4

TR－4はTR－1の北西に設定した東西トレンチである。現況は花壇であり，また，幾度となく整地を行っており，かなりの撹乱を受けていたが，近世後期の石組みの水路遺構を確認した。この水路遺構は石を3段積み，裏込めが施されており，高知城跡では比較的大規模なものである。

(1) 層序

第Ⅰ層は花壇に伴う土層である。第Ⅱ～Ⅻ層は整地層であり，ブロックや礫，ガラス，土管，コンクリート，ハンダなどが含まれており，近代から現代にかけてのものとみられる。

第Ⅻ・ⅩⅤ層も人為的な堆積層であり，近世後期とみられる。



層序

第Ⅰ層　明黄褐色(10YR7/6)礫質砂層で，細粒～粗粒礫を含む。(花壇)
第Ⅱ層　褐灰色(10YR4/1)シルト質砂層で，中粒～粗粒礫と炭化物を含む。(旧表土)
第Ⅲ層　黄橙色(7.5YR8/8)シルト質砂層
第Ⅳ層　褐灰色(7.5YR5/1)礫質砂層で，多量の中粒の円礫と炭化物を含む。
第Ⅴ層　にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト質砂層で，中粒～粗粒礫を多く含む。
第Ⅵ層　灰黄褐色(10YR5/2)砂質礫層で，細粒～中粒礫を非常に多く含む。
第Ⅶ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質砂層で，中粒～極粗粒礫を含む。
第Ⅷ層　にぶい黄橙色(10YR5/3)砂質礫層で，細粒～中粒の円礫を非常に多く含む。
第Ⅸ層　黄褐色(2.5Y5/3)礫質砂層で，粗粒の円礫を多く含む。
第Ⅹ層　灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト層で，中粒礫と炭化物，橙色シルトのブロックを多く含む。(整地層)
第Ⅺ層　にぶい黄橙色(10YR5/4)シルト質砂層で，中粒～極粗粒礫を多く含む。
第Ⅻ層　褐灰色(10YR4/1)シルト質砂層で，粗粒礫とコンクリートを含む。
第ⅩⅢ層　灰黄褐色(10YR6/2)砂質礫層で，細粒砂と中粒～粗粒礫を含み，若干の粘性あり。
第ⅩⅣ層　褐灰色(10YR6/1)シルト質中粒砂層で，灰黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。
第ⅩⅤ層　にぶい黄色(10YR8/3)砂質シルト層で，中粒砂と中粒礫を含む。
第ⅩⅥ層　灰色(N7/0)シルト層で，粗粒砂を含む。
第ⅩⅦ層　灰色(N6/0)粘土質シルト層で，中粒～粗粒礫を多く含む。

遺構埋土

1. 明黄褐色(10YR7/6)シルト質砂で，細粒礫を含む。
2. にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト質極細粒砂で，中粒礫と炭化物を含む。
3. にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルトで，極細粒砂を含む。
4. 灰黄褐色(10YR6/2)シルトで，細粒砂と粗粒礫，タイル，コンクリートを含む。
5. 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂で，中粒礫を多く含む。
6. 灰黄褐色(10YR5/2)礫質細粒砂で，中粒～極粗粒礫とハンダを含む。
7. にぶい褐色(7.5YR5/3)砂質礫で，漆喰を含む。
8. 灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粗粒砂で，極粗粒礫と漆喰，炭化物を含む。(SD－1埋土1)
9. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトで，橙色細粒礫と漆喰，炭化物，少量の焼土を含む。(SD－1埋土3)
10. 灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルトで，橙色細粒礫と炭化物を含む。(SD－1埋土4)
11. 暗灰黄色(2Y5/2)砂質シルトで，粗粒礫とマンガンを多く含む。(SD－1埋土5)
12. にぶい黄褐色(10YR5/3)礫質砂で，細粒礫を多く含む。(SD－1裏込)
13. 灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルトで，中粒砂と中粒礫を含む。

Fig.13　TR－4北壁セクション図

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

磁器(Fig.14－5)

5は蓋で，口縁部の約1/6が残存し，口径8.6cmを測る。口縁部は器壁が厚く，直立する。口縁部を除き透明釉を施し，外面の天井部には線描きの草文，口縁部には鋸歯文と圏線の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

第Ⅹ層出土遺物

磁器(Fig.14－6)

6は皿で，約2/3が残存し，底径9.2cmを測る。底部は蛇ノ目凹形高台で，全面に透明釉を施し，高台内を釉ハギする。見込には梅文の染付，外面の一部にも染付がみられる。胎土はやや密で，焼成は良好である。

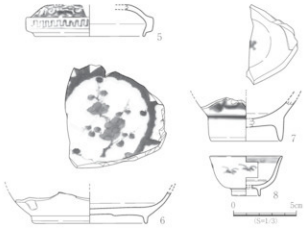


Fig.14　TR－4堆積層出土遺物実測図(磁器)

第Ⅺ層出土遺物

磁器(Fig.14－7･8)

7･8は碗である。7は肥前系の広東碗で，底部の約1/2が残存し，底径5.6cmを測る。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギを行う。外面と見込には一部に染付がみられる。胎土はやや密で，焼成は良好である。8は能茶山焼の端反碗で，約1/2が残存し，口径9.6cm，器高5.3cm，底径3.8cmを測る。全面に透明釉を施し，畳付を釉ハギする。外面には朝顔と蝶文の染付，内面には圏線と口縁部に濃による帯線がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

(3) 検出遺構

① 水路遺構

SD－1 (Fig.16)

検出長2.37m，幅0.70～0.76m，深さ0.92mを測る南北方向(N－10°－W)の石組みの水路遺構である。石を2～3段積み，石材は石灰岩が多く，その他チャートと砂岩で，大きなものは長さ0.80mを測るものもある。肩は直に立ち上がり，基底面は薄い割れ石が一部に残っており，割れ石を敷いていた可能性がある。また，幅0.68～0.95mの裏込めを持ち，にぶい黄褐色礫質砂に5～45cm大の石灰岩，チャート，砂岩の角礫が

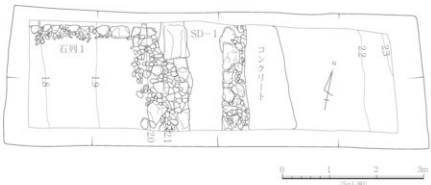


Fig.15　TR－4遺構平面図

多量に入っていた。埋土は5層に分かれ，埋土1は瓦が多量に入っており，短期間で堆積したものとみられる。埋土2は堆積が薄く，一部でのみ認められた。埋土3・4は長期に亙り徐々に堆積した埋土，埋土5は水路遺構が機能していた時期に堆積したものとみられる。出土遺物は埋土1から出土した陶器(9～11)，磁器(12～14)，埋土3から出土した磁器(15)，埋土4から出土した磁器(16)が図示できた。

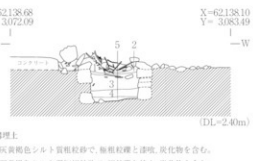


Fig.16　TR－4　SD－1セクション図

埋土1出土遺物

陶器(Fig.17－9～11)

9・10は行平鍋で，把手と片口を貼付する。器壁は薄く，口縁部は受口状を呈し，蓋が付くものとみられる。調整は回転ナデで，外面胴部下半は一部削りを行う。外面の胴部には鉄釉を施した後，飛鉋文を施す。口縁部は露胎で，内面は鉄泥をハケ塗りする。片口は型成形で，内外面に鉄釉を施す。把手は筒状で，上面には型押しの枠と波文がみられ，全面に鉄釉を施す。9は口縁部の約4/5が残存し，口径15.6cmを測り，把手は欠損する。10は底部が完存し，口径14.8cm，器高8.4cm，底径7.6cmを測り，片口を欠損する。色調は内外面とも暗赤褐色または橙色で，胎土は密で，焼成は良好であった。11は擂鉢で，約1/8が残存し，口径28.9cm，器高12.0cm，底径14.3cmを測る。体部と口縁部には回転ナデ調整を施し，内面には12本単位の擂り目が見られ，底部外面は無調整である。色調は内外面ともにぶい赤褐色を呈し，胎土はやや粗く白色礫を含み，焼成は良好である。

磁器(Fig.17－12～14)

12は中碗で，口縁部の約1/5が残存し，口径12.4cmを測る。全面に透明釉を施し，外面には蕪とみられる染付，口縁部内面には四方襷文の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。13は蓋付きの鉢で，口縁部の約1/4が残存し，口径14.4cmを測る。口縁部を除き，透明釉を施し，外面には家屋，山，雁の染付を施す。胎土は密で，焼成は良好である。14は鉢で，口縁部の一部が残存し，口径37.4cmを測る。口縁部と外面には透明釉を施し，内面は菊花文，口縁部は渦と帯線，外面は草花文の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

埋土3出土遺物

磁器(Fig.17－15)

15は能茶山焼の輪花皿で，底部が完存し，口径9.5cm，器高2.2cm，底径5.3cmを測る。型打ち成形で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギを行う。口縁部には口銹風に呉須を塗り，内面には山，波，帆舟文の染付，高台内には「サ」の銘がみられる。胎土は密で，焼成はやや不良である。

埋土4出土遺物

磁器(Fig.17－16)

16は端反の皿で，口縁部の一部が残存する。全面に灰白色の釉を薄く施す。胎土はやや密で，焼成は良好である。

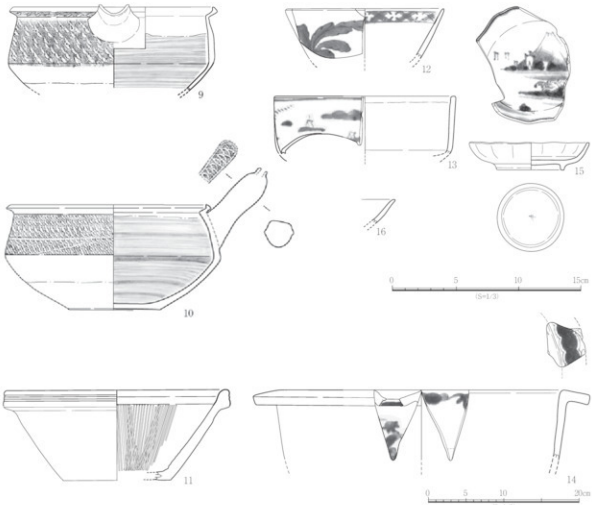


Fig.17　TR－4　SD－1出土遺物実測図

② 石列

石列1 (Fig.18)

第Ⅳ層の下で検出した東西方向(N－85°－E)の石列で，検出長2.36mを測る。東端はSD－1に切られる。石材はすべて石灰岩で，12～40cm長の細長い石を用い，北側に面をもつ。西端では2段積んでいることが確認され，高さ0.33mを測る。また，若干の裏込めがみられ，灰黄色粘土質シルトに3～17cm大の石灰岩と砂岩，わずかにチャートを含んでいた。出土遺物には土師質土器片8点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

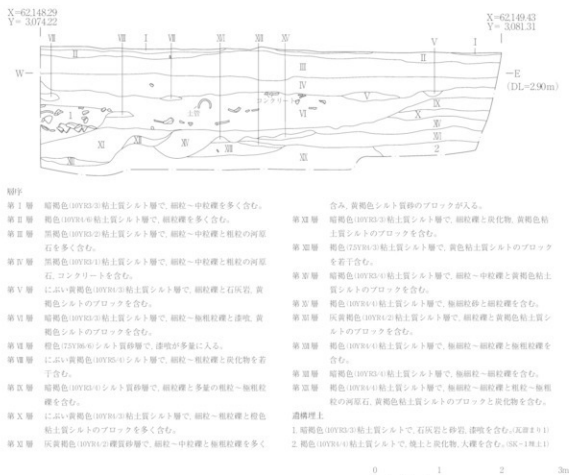
Fig.18　TR－4石列1セクション図

5. TR－5

TR－5はTR－4の北に設定した東西トレンチで，追手門の南側に位置する。コンクリートの基礎が残っており，遺構も一部撹乱を受けていたが，近世後期の瓦溜まりや近世前期の土坑を確認した。

(1) 層序

第Ⅰ・Ⅱ層は花壇に伴う土層である。



層序

第Ⅰ層　暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層で，細粒～中粒礫を多く含む。
第Ⅱ層　褐色(10YR4/6粘土質シルト層で，細粒礫を多く含む。
第Ⅲ層　黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層で，細粒～中粒礫と粗粒の河原石を多く含む。
第Ⅳ層　黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト層で，細粒～中粒礫と粗粒の河原石，コンクリートを含む。
第Ⅴ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層で，細粒礫と石灰岩，黄褐色シルトのブロックを含む。
第Ⅵ層　暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層で，細粒～極粗粒礫と漆喰，黄褐色シルトのブロックを含む。
第Ⅶ層　褐色(7.5YR86/6)シルト質砂層で，漆喰が多量に入る。
第Ⅷ層　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト層で，細粒～粗粒礫と炭化物を若干含む。
第Ⅸ層　暗褐色(10YR3/4)シルト質砂層で，細粒礫と多量の粗粒～極粗粒礫を含む。
第Ⅹ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層で，細粒～粗粒礫と橙色粘土質シルトのブロックを多く含む。
第Ⅺ層　灰黄褐色(10YR4/2)礫質砂層で，細粒～中粒礫と極粗粒礫を多く含み，黄褐色シルト質砂のブロックが入る。
第Ⅻ層　暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層で，細粒礫と炭化物，黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。
第ⅩⅢ層　褐色(7.5YR4/3)粘土質シルト層で，黄色粘土質シルトのブロックを若干含む。
第ⅩⅣ層　暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト層で，細粒～中粒礫と黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。
第ⅩⅤ層　褐色(10YR4/4)粘土質シルト層で，極細粒砂と細粒礫を含む。
第ⅩⅥ層　灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層で，細粒礫と黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。
第ⅩⅦ層　褐色(10YR4/4)粘土質シルト層で，極細粒～細粒礫と極粗粒礫を含む。
第ⅩⅧ層　暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト層で，極細粒～細粒礫を含む。
第ⅩⅨ層　褐色(10YR4/4)粘土質シルト層で，極細粒～細粒礫と粗粒～極粗粒の河原石，黄褐色粘土質シルトのブロックと炭化物を含む。

遺構埋土
1. 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトで，石灰岩と砂岩，漆喰を含む。(瓦溜まり1)
2. 褐色(10YR4/4)粘土質シルトで，焼土と炭化物，大礫を含む。(SK－1埋土1)

0　1　2　3m
(S=1/60)

Fig.19　TR－5北壁セクション図

第Ⅲ・Ⅳ層はほぼ水平に堆積し，第Ⅴ層はブロック状に入る。

第Ⅵ層は瓦を多く含んでおり西端では瓦の堆積(瓦溜まり1)がみられた。第Ⅶ・Ⅷ層は第Ⅵ層中にブロック状に入る。

第Ⅺ～ⅩⅢ層は西に向かって傾斜する。第Ⅺ～ⅩⅢ層はブロックを含み，人為的な堆積層とみられる。第ⅩⅣ層を除去した段階で土坑を検出した。

第ⅩⅤ層はトレンチでのみ確認した層で，近世の遺物が出土している。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

青花(Fig.20－17)

17は青花の碗で，約2/3が残存し，底径5.6cmを測る。粗雑な作りで，底部にはややハの字に開く高台を有する。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギを行う。内外面に文様不明の染付がみられる。胎土はやや粗く，焼成は良好である。

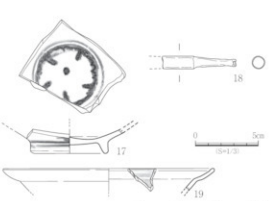


Fig.20　TR－5堆積層出土遺物実測図
(青花・陶器・銅製品)

第Ⅺ層出土遺物

銅製品(Fig.20－18)

18は煙管の吸口で，一部を欠損する。残存長5.8cm，全幅1.0cmを測る。全面に錆化がみられる。

第Ⅹ層出土遺物

陶器(Fig.20－19)

19は鉢で，口縁部の一部が残存する。器胎に白化粧土を施した後，内面には褐色釉を刷毛塗りし，全面に透明釉を施す。色調は内外面ともにぶい黄褐色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

(3) 検出遺構

① 土坑

SK－1 (Fig.22)

第Ⅻ層の下で検出した土坑で，東側はトレンチ外に続く。円形を呈するとみられ，検出長は1.92m，深さ0.63mを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は5層に分かれ，埋土3～5には大礫が特に多く含まれる。出土遺物には須恵器片1点，土師質土器片26点，瓦質土器片1点，青磁片1点，青花片3点，陶器片9点，磁器片11点，平瓦，丸瓦，土製品，鉄滓がみられ，土師質土器(20・29)，青花(21・30)，陶器(22・25・28)，磁器(23・26)，土製品(24)，石製品(27)が図示できた。

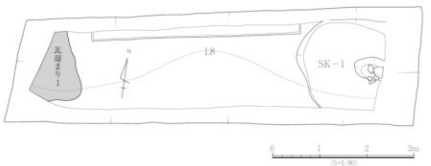


Fig.21　TR－5遺構平面図

埋土1出土遺物

土師質土器(Fig.23－20)

20は皿で，約1/8が残存し，口径10.4cm，器高2.0cm，底径5.1cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明で，底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈し，胎土は密で，焼成はやや良好である。

青花(Fig.23－21)

21は華南系の皿で，口縁部の一部が残存し，口径13.6cmを測る。全面に透明釉を施すが，焼成不良のため釉には光沢がない。内面には染付を施す。色調は内外面とも灰白色を呈し，胎土はやや粗く，焼成はやや不良である。

陶器(Fig.23－22)

22は匣鉢で，約1/2が残存し，口径18.4cm，器高7.5

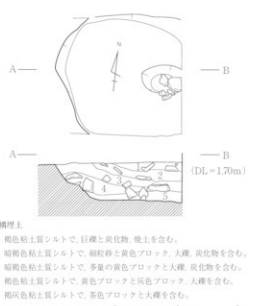


Fig.22　TR－5　SK－1

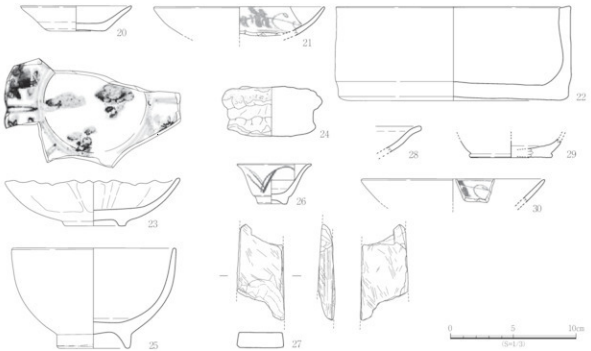


Fig.23　TR－5　SK－1出土遺物実測図

cm，底径17.0 cmを測る。調整は回転ナデの後，口縁部にヨコナデを行い，底部外面は無調整で，砂が付着する。体部外面と口縁端部には鉄釉を施す。色調は外面が灰白色，内面が灰褐色を呈し，胎土は粗く，焼成は良好である。

磁器(Fig.23－23)

23は初期伊万里の輪花皿で，底部が完存し，口径13.6 cm，器高3.7 cm，底径4.7 cmを測る。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギを行う。内面には区画内に草花文の染付を施す。被熱した為か釉には光沢がなく，染付も痕跡のみ残る部分が多い。胎土はやや密で，焼成はやや不良である。

土製品(Fig.23－24)

24は焼台である。柱状を呈し，中位が若干くびれ，器高4.0 cm，全幅7.9 cmを測る。上面は輪状に砂が付着し，側面は釉がかかり，下面には全面に砂が付着する。色調は黒色または褐色を呈する。

埋土2出土遺物

陶器(Fig.23－25)

25は肥前系の丸碗で，底部が完存し，口径12.8 cm，器高8.0 cm，底径5.6 cmを測る。内面と外面の高台まで灰釉を薄く施し，高台内は露胎である。釉には貫入が入る。釉調は淡黄色，生地は灰白色を呈し，胎土はやや粗く，焼成は良好である。

磁器(Fig.23－26)

26は肥前系の小杯で，ほぼ完存し，口径5.5 cm，器高3.2 cm，底径2.4 cmを測る。内外面に白色釉を薄く施し，畳付と高台内は露胎で，内外面に若干の砂が付着する。外面には草文の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

石製品(Fig.23－27)

27は砥石で，一部が残存し，残存長7.6㎝，全幅3.8㎝，全厚1.2㎝を測る。断面は矩形を呈し，残存部で3面の使用が認められる。石材は不明である。

埋土3出土遺物

陶器(Fig.23－28)

28は唐津焼の皿で，口縁部の一部が残存する。内面と口縁部外面に灰釉を薄く施し，体部下半は露胎である。釉調は明褐灰色で，生地はにぶい赤褐色である。胎土はやや粗く，焼成はやや不良である。

埋土5出土遺物

土師質土器(Fig.23－29)

29は杯で，底部の約1/6が残存し，底径6.4㎝を測る。器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土は密で，焼成はやや良好である。

青花(Fig.23－30)

30は皿で，口縁部の一部が残存し，口径14.6㎝を測る。全面に透明釉を施すが，焼成不良のため釉には光沢がない。内面には染付を施す。色調は内外面とも灰白色を呈し，胎土はやや粗く，焼成はやや不良である。

② 瓦溜まり

瓦溜まり1

第Ⅵ層中で確認した瓦の堆積である。埋土は暗褐色粘土質シルトで，石灰岩と砂岩，漆喰と共に瓦が多量に含まれていた。出土遺物には土師質土器片8点，瓦器片1点，陶器片3点，磁器片5点，丸瓦，平瓦，桟瓦，鉄製品がみられ，陶器(31)，磁器(32・33)，鉄製品(34)が図示できた。

出土遺物

陶器(Fig.24－31)

31は碗で，底部の約1/2が残存し，底径5.0㎝を測る。内面と外面の高台まで透明釉を薄く施し，畳付と高台内は露胎で，ロクロ目が顕著に残る。見込には足付きハマ痕がみられる。色調は灰黄色を呈し，胎土はやや粗く，焼成は良好である。

磁器(Fig.24－32・33)

32は波佐見焼の皿で，約1/3が残存し，口径12.4㎝，器高3.6㎝，底径4.3㎝を測る。全面に透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギ，見込は蛇ノ目釉ハギを行い，釉ハギを行った部分には砂が付着する。口縁部内面には二重格子文の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。33は小杯で，底部が完存し，底径2.9㎝を測る。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギを行う。胎土はやや密で，焼成は良好である。

鉄製品(Fig.24－34)

34は丁字形を呈する釘で，ほぼ完存し，全長11.2㎝，全幅3.8㎝，全厚1.3㎝を測る。断面は矩形を呈し，全面に錆化がみられる。

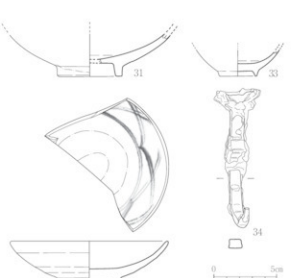


Fig.24　TR－5瓦溜まり1出土遺物実測図

6. TR－6

TR－6はTR－4の西に設定した南北トレンチである。近世後期の石組みの水路遺構や近世前期の土坑を確認した。

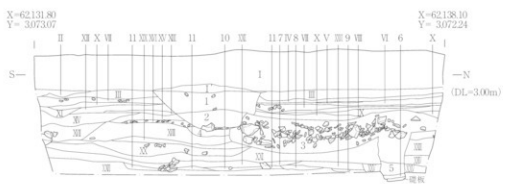
⑴ 層序

第Ⅰ層は花壇に伴う土層である。

第Ⅱ～Ⅻ層は近代から現代にかけての整地層，第ⅩⅢ～ⅩⅢ層は近世後期から近代にかけての堆積層または整地層である。

第ⅩⅢ～ⅩⅩ層は近世後期，第ⅩⅩⅠ層は近世前期の堆積層である。

⑵ 堆積層出土遺物



層序

第Ⅰ層　明黄褐色(10YR6/6)シルト層で，細粒～極粗粒礫を含み，下部には石灰岩が入る。(花壇)

第Ⅰ′層　橙色(7.5YR6/8)シルト層で，極粗粒礫を少し含む。

第Ⅱ層　褐色(10YR4/4)粘土質シルト層で，細粒～粗粒礫とコンクリートを含む。

第Ⅲ層　明褐色(10YR5/6)粘土質シルト層で，細粒～中粒礫を含む。

第Ⅳ層　明褐色(7.5YR5/6)粘土質シルト層で，細粒～中粒礫を含む。

第Ⅴ層　黒褐色(2.5Y3/1)礫層

第Ⅵ層　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質礫層で，細粒～粗粒の河原石を含む。

第Ⅶ層　褐色(10YR4/4)礫層で，粗粒～極粗粒の河原石を多量に含む。

第Ⅷ層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土質シルト層で，炭化物を若干含む。

第Ⅸ層　褐色(10YR4/6)粘土質シルト層で，細粒～中粒礫と明褐色粘土質シルトのブロックを含む。

第Ⅹ層　明褐色(7.5YR5/6)粘土質シルト層で，細粒～中粒礫と極粗粒礫を含む。

第Ⅺ層　褐色(7.5YR4/4)粘土質シルト層で，粗粒礫と漆喰を含む。

第Ⅻ層　暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト層で，細粒～粗粒の河原石と若干の炭化物を含む。

第ⅩⅢ層　黄褐色(10YR5/6)砂質礫層

第ⅩⅣ層　暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層で，細粒～粗粒礫，褐色粘土質シルトのブロックを含む。

第ⅩⅤ層　褐色(10YR4/6)粘土質シルト層で，細粒～粗粒礫と河原石を含む。

第ⅩⅥ層　灰色(5Y5/1)砂質礫層で，中粒～粗粒の河原石を多量に含む。

第ⅩⅦ層　暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層で，細粒～粗粒礫を含む。

第ⅩⅧ層　褐色(10YR4/4)粘土質シルト層で，極細粒～細粒礫と粗粒礫，明黄褐色粘土質シルトのブロック，炭化物を含む。

第ⅩⅨ層　褐色(10YR4/4)粘土質シルト層で，極細粒～細粒礫を含む。

第ⅩⅩ層　褐色(10YR4/6)粘土質シルト層で，多量の極粗粒礫～大礫と褐色粘土質シルトのブロックを含む。

第ⅩⅩⅠ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層で，極細粒～細粒礫と極粗粒礫，明褐色シルトのブロックと炭化物を含む。

第ⅩⅩⅡ層　褐色(10YR4/4)粘土質シルト層で，極細粒～細粒礫と極粗粒礫～大礫を含む。

第ⅩⅩⅢ層　明褐色(10YR4/6)粘土質シルト層で，極細粒～細粒礫と粗粒～極粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅣ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層で，粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅤ層　褐色(10YR4/6)粘土質シルト層で，粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅥ層　褐色(10YR4/4)粘土質シルト層で，細粒礫と炭化物を含む。

第ⅩⅩⅦ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層で，炭化物を含む。

遺構埋土

1．褐色(10YR4/4)礫で，中粒～極粗粒礫と極粗粒の河原石を多く含み，若干の漆喰を含む。(SK－1埋土1)

2．褐色(10YR4/6)粘土質シルトで，細粒礫と少量の灰白色粘土ブロックを含む。(SK－1埋土2)

3．灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで，極細粒～極粗粒の河原石と石灰岩，瓦を多量に含む。(瓦溜まり1)

4．褐色(10YR4/6)粘土質シルトで，細粒～中粒礫を含む。

5．暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト(P－1埋土1)

6．褐色(10YR4/6)粘土質シルトで，粗粒礫を含む。(P－1埋土2)

7．灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで，中粒～粗粒の河原石を含む。

8．褐色(10YR4/4)粘土質シルトで，中粒礫を含む。

9．黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで，炭化物を多量に含む。

10．暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトで，極細粒～極粗粒礫と大礫を若干含み，多量の炭化物を含む。(SX－1埋土1)

11．黒色(10YR1.7/1)砂質シルトで，炭化物の堆積。(SX－1埋土2)

0　1　2　3m
(S=1/60)

Fig.25　TR－6西壁セクション図

第Ⅰ層出土遺物

瓦(Fig.26－35)

35は丸瓦で，筒部の一部が残存する。凸面はナデ調整，凹面はコビキＡの痕跡と縄目痕が残る。色調は灰白色を呈し，胎土はやや密で1㎝大の礫を含み，焼成は良好である。

第Ⅻ層出土遺物

陶器(Fig.26－36)

36は鉢で，口縁部の一部が残存する。口縁部は粘土を貼付し，顎が張る。器面には回転ナデ調整を施し，体部外面に回転ヘラ削り，頸部にはナデ調整を加える。色調は内外面とも灰赤色を呈し，胎土はやや粗く，白色礫とチャートを含み，焼成は良好である。

磁器(Fig.26－37・38)

37は肥前系の中碗で，底部が完存し，底径4.0㎝を測る。全面に透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。外面は圏線と二重格子文とみられる染付，見込には圏線と岩と波の染付がみられる。胎土はやや密で，焼成は良好である。38は肥前系の輪花皿で，底部の約1/6が残存し，底径8.6㎝を測る。底部は蛇ノ目凹形高台で，全面に透明釉を薄く施し，高台内を釉ハギする。胎土は密で，焼成は良好である。

第ⅩⅩ層出土遺物

磁器(Fig.26－39)

39は端反碗で，約1/5が残存し，口径11.0㎝，器高6.1㎝，底径4.5㎝を測る。全面に透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。外面は圏線と文様不明の線描きの染付，口縁部内面に雷文，見込に環状の松竹梅文の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

土製品(Fig.26－40)

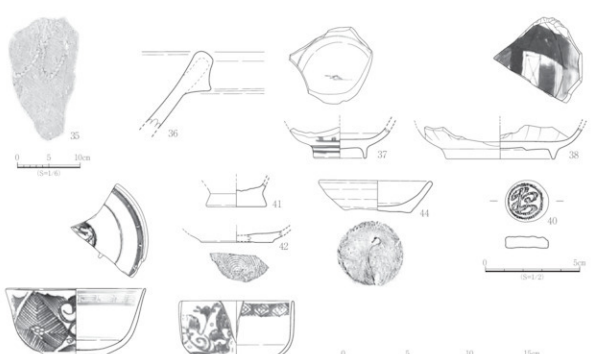


Fig.26　TR－6堆積層出土遺物実測図(土師質土器・陶器・磁器・瓦・土製品)

40は泥面子で，完存し，径2.2cm，全厚0.6cmを測る。調整はナデ調整で，指頭圧痕が残り，上面には丸に「相」とみられる文字が型押しされる。色調は橙色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

第Ⅹ層出土遺物

土師質土器(Fig.26－41・42)

41・42は杯である。41は底部が残存し，底径4.6cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し，胎土は密で，焼成はやや良好である。42は底部の約1/3が残存し，底径5.6cmを測る。調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土はやや密で，焼成はやや良好である。

磁器(Fig.26－43)

43は丸碗で，口縁部の約1/8が残存し，口径8.0cmを測る。全面に透明釉を施し，外面には線描きの草花文，口縁部内面には四方襷文の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

第Ⅺ層出土遺物

土師質土器(Fig.26－44)

44は皿で，ほぼ完存し，口径8.8cm，器高2.6cm，底径5.2cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切りで，一部ナデ調整を加える。口縁部内面には馬蹄形に煤が付着する。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土はやや密で，焼成はやや良好である。

(3) 検出遺構

下層検出遺構

① 性格不明遺構

SX－1

第Ⅸ層の下で検出した遺構で，西側はトレンチ外に続く。円形または楕円形を呈するとみられ，径3.00mを測り，残存状態が良好な部分で，深さ9cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトで，極粗粒礫と大礫を若干含んでいた。また，多量の炭化物を含み，2箇所に炭化物が集中し，その中より鉄滓が出土しており，鍛冶関連遺構とみられる。出土遺物には東播系須恵器，土師質土器，瀬戸焼，近世陶器片，鉄釘片，平瓦，丸瓦(コビキBのみ)がみられ，東播系須恵器(45)，土師質土器(46・47)，瀬戸焼(48)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器(Fig.29－45)

45は片口鉢で，口縁部の一部が残存する。粘土紐巻き上げ成形で，器面には回転ナデ調整を施す。口縁部外面には重ね焼痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し，胎土はやや粗く，砂粒を多く含み，焼成は良好である。

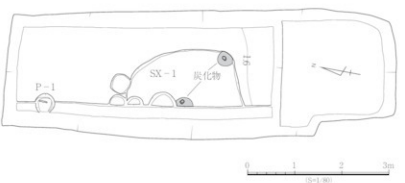


Fig.27 TR－6下層遺構平面図

土師質土器(Fig.29－46・47)

46は皿で，約1/3が残存し，口径11.0cm，器高3.1cm，底径5.1cmを測る。器面には回転ナデ調整を施した後，内底面にナデ調整を加え，口縁部内外面には煤が付着する。底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも黄灰色または灰黄色を呈し，胎土はやや密で，砂粒を多く含み，焼成は良好である。47は小皿で，約1/2が残存し，口径6.6cm，器高1.2cm，底径4.2cmを測る。調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。器面には白色の物が付着する。色調は内外面とも灰白色を呈し，胎土は密で，焼成はやや良好である。

瀬戸焼(Fig.29－48)

48は丸皿で，約1/4が残存し，口径10.9cm，器高1.5cm，底径7.2cmを測る。底部には低い削り出し高台が付き，全面に緑釉を薄く施す。釉調は浅黄色またはオリーブ色，生地は灰白色を呈し，胎土はやや粗く，焼成は良好である。

上層検出遺構

① 土坑

SK－1

第Ⅰ層の下で検出された土坑で，両端は調査区外に続く。楕円形を呈するとみられ，長径3.00m，短径2.20m，深さ0.54mを測る。埋土は2層に分かれ，上層は褐色礫，下層は褐色粘土質シルトであった。埋土からは陶磁器，桟瓦，ガラスなどが出土しており，明治期から昭和期にかけての廃棄土坑とみられ，陶器(49)が図示できた。

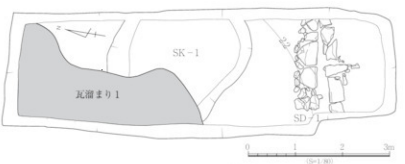


Fig.28　TR－6上層遺構平面図

出土遺物

陶器(Fig.29－49)

49は灯明受皿で，一部を欠損し，口径5.0cm，器高5.7cm，底径5.6cmを測る。口縁部は1箇所に口が付く。器面には回転ナデ調整を行う。体部内外面に灰釉を薄く施し，口縁端部は釉ハギを行い，底部外面は露胎である。色調は釉と生地共に灰白色を呈し，胎土は密で，焼成は良好であった。

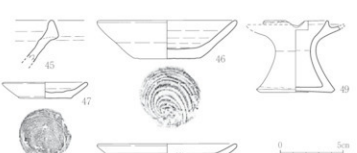


Fig.29　TR－6　SX－1，SK－1出土遺物実測図

② ピット

P－1

瓦溜まり1の底で検出されたピットで，円形を呈し，径0.42m，深さ0.72mを測る。埋土は上層に瓦

溜まり1の埋土が入り込み，その下が2層に分かれ，上層が暗褐色粘土質シルト，下層が褐色粘土質シルトで粗粒礫が入っていた。基底面には厚さ4cmを測る砂岩の礫板がみられ，その上には木片が残っていた。出土遺物は皆無であった。

③ 水路遺構

SD－1 (Fig.30)

検出長1.98mを測る東西方向(N－84°－E)の石組みの水路遺構で，両端はトレンチ外へ続く。SD－1は2時期に亙って機能しており，当初は幅0.56mで石を2段積んでおり，若干の裏込めがみられた。深さは0.46mを測り，基底面は平らで，敷石等は確認されなかった。その後，南側の上の石が外され，水路を5cm程度の深さまで埋め戻し，幅約26cmの所に石を設置し直している。北側の石組みは当初の位置を動いていないとみられるが，新たに設置し直した南側の石は北側よりも若干高い位置に設置されている。石材は砂岩と石灰岩が多く，チャートも若干みられる。埋土は3層に分かれ，埋土1・2は水路遺構の幅を狭めた時の埋土とみられ，埋土1・2からは近世陶磁器，土師質土器片，青磁片，平瓦，丸瓦が出土している。また，南側の石組みの裏込めからは土師質土器片，瓦質土器片，近世陶磁器片，鉄釘片など近世後期の遺物が出土しているが，復元図示できるものはなかった。

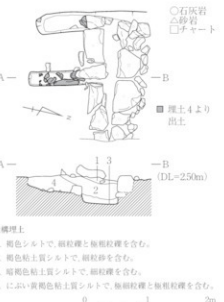


Fig.30 TR－6 SD－1

④ 瓦溜まり

瓦溜まり1

第X層の下で確認した瓦の堆積である。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで，石灰岩と河原石と共に瓦が多量に含まれていた。出土遺物には土師質土器，瓦質土器，近世陶磁器，丸瓦，平瓦，桟瓦，土製品がみられ，土師質土器(50～52)，瓦質土器(53)，陶器(54～60)，磁器(61～68)，土製品(69)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.31－50～52)

50は杯で，底部の約1/8が残存し，底径7.2cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明で，底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し，胎土は密で，焼成はやや良好である。51・52は焜炉で，口縁端部が内側に肥厚する。51は筒形を呈するもので，口縁部の一部が残存し，口径18.0cmを測る。胴部には円孔の一部が残存し，調整は回転ナデで，口縁端部から外面にかけて赤色塗彩がみられる。色調は内面が橙色，外面がにぶい赤色を呈し，胎土は密で，金雲母が入り，焼成は良好である。52は鉢形を呈するものとみられ，口縁部の一部が残存し，口径19.8cmを測る。調整は回転ナデで，外面にはミガキを加える。胴部には残存部で3箇所に円孔がみられる。色調は内面がにぶい黄橙色，外面が橙色を呈し，胎土はやや粗く，白色砂粒が入り，焼成は良好である。

瓦質土器(Fig.31－53)

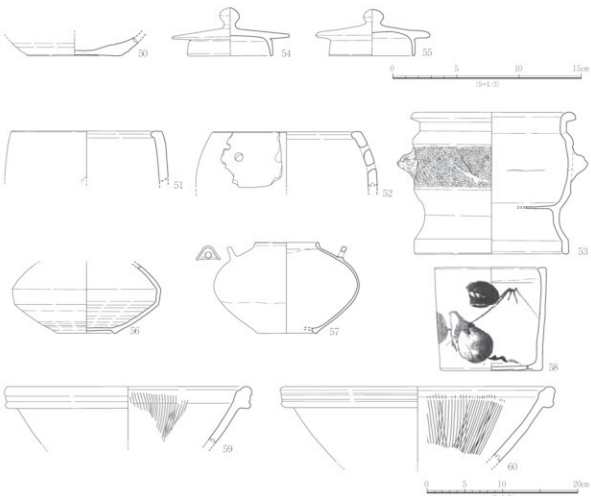


Fig.31　TR－6瓦溜まり1出土遺物実測図1

53は火鉢で，胴部はほぼ完存し，口径20.2㎝，器高18.8㎝，底径20.1㎝を測る。胴部は円筒形で，直立する脚を有する。粘土帯積み上げ成形とみられ，型成形の獅子面の双耳を貼付する。調整は胴部内面が横方向の板ナデ調整，口縁部はヨコナデ，胴部外面は型による文様を施す。脚部は回転ナデ調整で，胴部との接合部は丁寧なナデ調整を施す。器面の一部には炭素が吸着し，色調は内外面とも灰色または黄灰色を呈し，胎土はやや密で，焼成はやや良好である。

陶器(Fig.31－54～60)

54・55は蓋で，宝珠形のつまみが付く。調整は回転ナデで，笠部外面には銅緑釉を施し，その他は露胎である。54は完存し，笠部径9.3㎝，器高3.8㎝，かえり部径6.6㎝を測る。土瓶の蓋で，57とセットになるものとみられる。色調は釉調が緑灰色，生地がにぶい黄褐色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。55はほぼ完存し，笠部径9.1㎝，器高3.7㎝，かえり部径6.8㎝を測る。色調は釉調が緑灰または青色，生地が灰黄色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

56・57は土瓶である。56は算盤玉形を呈するもので，胴部の約1/4が残存し，底径7.8㎝を測る。調整は回転ナデで，外面の胴部下半には回転ヘラ削りを加え，底部には低い削り出し高台が付く。外面の胴部上半と内面の一部に鉄釉を薄く施す。釉調は黒色，生地はにぶい黄褐色または褐色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。57は胴部が丸味を有するもので，54の蓋とセットになるものとみら

れる。約1/2が残存し，口径7.8cm，器高12.1cm，底径8.0cmを測る。肩には三角形を呈する把手取り付け部を2箇所に貼付し，外側には沈線による文様を施す。調整は回転ナデで，外面と口縁部内面は白化粧土を塗り，外面胴部上半と口縁部，把手取り付け部には銅緑釉を施し，口縁端部は釉ハギを行う。釉調は緑灰色，生地はにぶい褐色または灰白色を呈し，胎土は密で，焼成は良好であった。

58は筒形の火入れとみられ，約1/3が残存し，口径14.4cm，器高13.7cm，底径13.0cmを測る。調整は回転ナデで，底部には低い削り出し高台が付き，3箇所に径2㎜の円孔を穿つ。体部外面には白化粧土をハケ塗りし，富士山と茄子のコバルトによる染付を施す。体部外面と口縁部内外面には透明釉を薄く施す。内底面には火を受けた痕跡がみられ，口縁端部には焼成後の敲打痕が残る。色調は内面がにぶい黄褐色，外面が緑灰色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

59･60は擂鉢で，口縁部の一部が残存する。調整は回転ナデで，内面には11本単位の擂り目を施す。59は口径31.8cmを測り，色調は褐灰色を呈し，胎土はやや粗く砂粒を多く含み，焼成は良好である。60は口径25.0cmを測り，色調は内面が赤褐色，外面が赤褐色または灰褐色を呈し，胎土はやや粗く白色礫を多く含み，焼成は良好である。

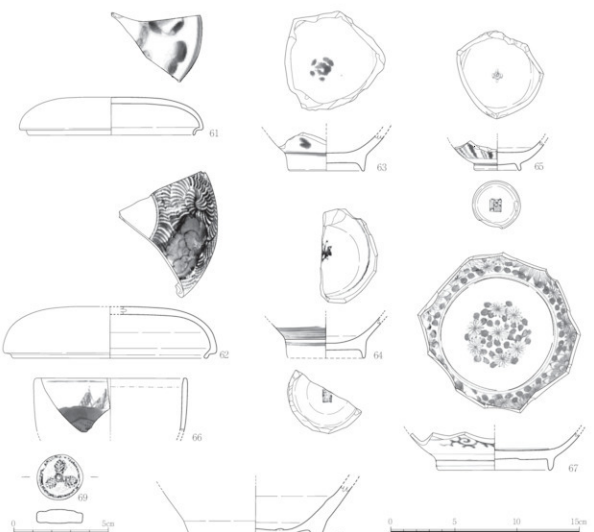


Fig.32　TR－6瓦溜まり1出土遺物実測図2

磁器(Fig.32－61～68)

61・62は鉢の蓋とみられ，全面に透明釉を施し，かえり部は釉ハギを行う。61は約1/8が残存し，かえり部径13.2cm，器高3.0cmを測る。外面には宝文とみられる染付を施す。胎土は密で，焼成は良好である。62は約1/8が残存し，かえり部径15.3cm，器高4.1cmを測る。外面には花文の染付を施す。胎土は密で，焼成は良好である。

63は瀬戸・美濃系の広東碗で，底部が完存し，底径6.0cmを測る。全面に白化粧土を施した後，透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。外面には圏線と文様不明の染付，見込には花文と圏線の染付がみられる。胎土はやや密で，焼成はやや良好である。64は能茶山焼の広東碗で，底部の約1/2が残存し，底径6.0cmを測る。全面に透明釉を施し，外面には圏線，見込には宝文とみられる染付，高台内には枠内に「茶」の銘を施す。胎土は密で，焼成は良好である。65は能茶山焼の碗で，底部が完存し，底径3.5cmを測る。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギを行う。外面には縞文，見込には圏線と宝文の染付，高台には枠内に「茶山」の銘がみられる。胎土はやや密で，焼成は良好である。

66は蓋物の身で，口縁部の一部が残存し，口径12.0cmを測る。全面に透明釉を施し，口縁部は釉ハギを行い，外面には山，家屋文の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。67は皿で，底部が完存し，底径8.9cmを測る。底部は蛇ノ目凹形高台で，全面に透明釉を施した後，畳付と高台内の一部を釉ハギする。外面には圏線と蛸唐草文，内面と見込には花文の染付を施す。胎土は密で，焼成は良好である。68は瓶で，底部の約1/2が残存し，底径9.6cmを測る。底部には削り出し高台が付く。調整は回転ナデで，外面には透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。高台内は露胎で，見込には釉と礫が付着する。胎土は密で，焼成は良好である。

土製品(Fig.32－69)

69は泥面子で，完存し，径2.4cm，全厚0.7cmを測る。調整はナデで，指頭圧痕が残り，上面には丸に三つ葉文が型押しされる。色調は橙色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

7. TR－7

TR－7はTR－6の西12mに設定した南北トレンチである。TR－6の水路遺構に繋がるとみられる近世後期の石組みの水路遺構や，ピット，土坑などを検出した。

(1) 層序

第Ⅰ層は現表土で，一部芝生が敷かれていた。

第Ⅱ～Ⅻ層は近代から現代にかけての整地層で，トレンチ南部は著しく撹乱を受けており，多量のコンクリートが入っていた。また，表土下25cmと0.80mで東西方向の石灰岩の石列がみられた。

第ⅩⅢ～ⅩⅤ層は近世後期から近代にかけての整地層とみられ，極粗粒礫を多く含んでいた。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

磁器(Fig.34－70)

70は肥前系の丸碗で，口縁部の約1/6が残存し，口径10.6cmを測る。全面に透明釉を施し，外面と口縁部内面には網目文の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

第XV層出土遺物

陶器(Fig.34－71)

器種不明の陶器で，口縁部の一部が残存し，口径32.4 cmを測る。体部は直立し，口縁部は受口状を呈する。全面に緑釉を施し，口縁部外面には型押しの雷文帯がみられる。釉調は緑色，生地は灰白色を呈し，胎土はやや粗く，焼成は良好である。

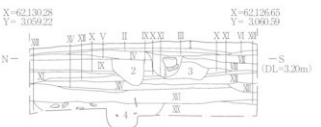
第XVI層出土遺物

陶器(Fig.34－72)

72は瓶類とみられ，底部の約1/2が残存し，底径9.2 cmを測る。底部には削り出し高台を有し，4箇所に外面より径約3 mmの円孔を穿つ。調整は回転ナデで，外面には灰釉を施し，内面は露胎である。胎土は密で，焼成は良好である。

磁器(Fig.34－73)

73は丸碗で，底部が完存し，底径3.8 cmを測る。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギを行い，外面には唐草文の染付がみられる。胎土はやや密で，焼成は良好である。



層序

第Ⅰ層　にぶい黄橙色(10YR7/4)礫質砂層
第Ⅱ層　褐灰色(10YR6/2)砂質礫層で，細粒の円礫を非常に多く含む。
第Ⅲ層　浅黄橙色(10YR8/3)礫質砂層
第Ⅳ層　浅黄橙色(7.5YR8/6)礫質砂層で，締まりがある。
第Ⅴ層　浅黄橙色(10YR8/3)砂層で，非常に締まる。
第Ⅵ層　浅黄橙色(10YR8/3)礫質砂層
第Ⅶ層　にぶい黄橙色(10YR7/4)礫質砂層で，灰褐色シルトのブロックを含む。
第Ⅷ層　灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト層で，中粒～極粗粒礫とコンクリートを含む。
第Ⅸ層　灰白色(10YR5/3)礫質砂層で，中粒～極粗粒礫を多く含む。
第Ⅹ層　黄橙色(10YR8/6)砂層
第Ⅺ層　黒色(N2/0)砂質礫層で，細粒礫を含む。(炭化物の焦痕)
第Ⅻ層　にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質礫層で，大礫とコンクリートを含む。
第Ⅻ層　にぶい黄橙色(10YR7/4)礫質砂層で，中粒礫を含む。
第Ⅻ層　灰褐色(7.5YR5/2)礫質極粗粒砂層で，中粒礫と炭化物を含む。
第Ⅻ層　明黄褐色(10YR7/6)砂層で，締まる。
第Ⅻ層　にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質礫層で，粗粒～極粗粒礫を多く含む。
第Ⅻ層　にぶい褐色(7.5YR6/3)礫質砂層で，瓦を含む。
第Ⅻ層　にぶい黄橙色(10YR7/2)礫質砂層で，極粗粒礫と瓦を含む。
第Ⅻ層　灰褐色(7.5YR6/2)シルト質砂層で，極粗粒礫と炭化物を含む。

遺構埋土

1. にぶい黄橙色(10YR7/2)礫質砂(石灰石の石質)
2. 明黄褐色(10YR7/6)砂で，極粗粒礫と瓦，コンクリートを含む。
3. 明黄褐色(10YR7/6)礫質砂で，粗粒礫と炭化物を含む。
4. 明褐色(7.5YR5/6)シルト質砂で，細粒～中粒礫と橙色の細粒礫，漆喰，少量の炭化物を含む。(SD－1)

Fig.33　TR－7東壁セクション図

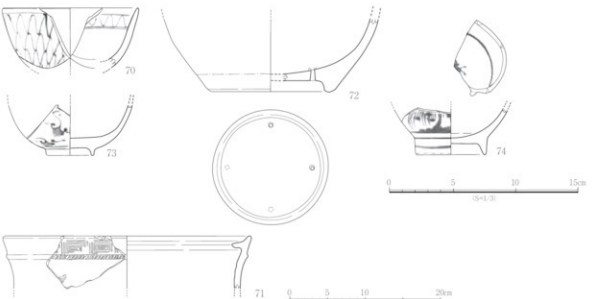


Fig.34　TR－7堆積層出土遺物実測図(陶器・磁器)

第Ⅻ層出土遺物

磁器(Fig.34－74)

74は肥前系の広東碗で，底部の約1/4が残存し，底径5.4cmを測る。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギを行い，外面には圏線と樹文，見込には圏線と文様不明の染付がみられる。胎土はやや密で，焼成は良好である。

(3) 検出遺構

遺構はすべて第Ⅻ層の下で検出された。

① 土坑

SK－1

トレンチ南部で検出した土坑で，東はトレンチ外へ続く。楕円形を呈するものとみられ，長径1.24m，短径0.75m，深さ12cmを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は褐灰色シルト質砂で浅黄橙色砂のブロックと粗粒礫を含んでおり，西端には集石がみられた。出土遺物は皆無であった。

SK－2

楕円形を呈する土坑で，長径0.85m，短径0.73m，深さ21cmを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は暗褐色シルト質砂で，中粒礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点，近世磁器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

② 溝跡

SD－1

トレンチ東部で検出した溝跡で，東側の肩はトレンチ外へ続く。SK－1を切り，検出長2.92m，深さ5cmを測り，断面は船底形を呈する。埋土は明褐色シルト質砂で，中粒礫と漆喰，炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点，陶器片3点，磁器5点がみられ，磁器1点(75)が図示できた。

出土遺物

磁器(Fig.37－75)

75は肥前系の紅皿で，完存し，口径5.0cm，器高1.5cm，底径1.5cmを測る。型成形で，貝殻形を呈し，内面と口縁部外面に白色釉を施す。胎土は密で，焼成は良好である。

③ 水路遺構

SD－2(Fig.36)

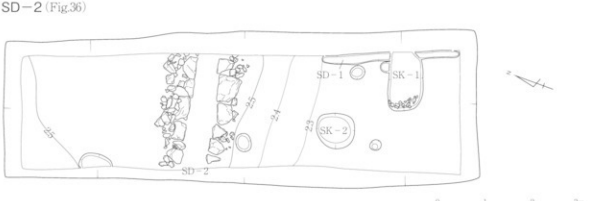


Fig.35　TR－7遺構平面図

検出長2.44mを測る東西方向(N－79°－E)の石組みの水路遺構で，両端はトレンチ外へ続く。TR－6のSD－1と繋がるものとみられる。石は1段で，0.28～0.53m大の石を並べており，幅0.46～0.50m，深さ0.33mを測り，幅0.20～0.40m程度の裏込めがみられた。基底面は平らで，敷石等は確認されなかった。石材は砂岩と石灰岩で，裏込めには少量のチャートが含まれていた。埋土は明褐色シルト質砂で，中粒礫と漆喰，炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器1点，陶器片2点，磁器9点，軒丸瓦，丸瓦，平瓦，桟瓦がみられ，土師質土器(76)，磁器2点(77・78)，丸瓦(79)が図示できた。

Fig.36　TR－7　SD－2

出土遺物

土師質土器(Fig.37－76)

76は杯で，底部の約1/6が残存し，底径6.1cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

磁器(Fig.37－77・78)

77は能茶山焼の端反碗で，口縁部の一部が残存し，口径10.8cmを測る。全面に透明釉を施し，外面には草花文，内面には圏線の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。78は壺とみられ，底部の約1/2が残存し，底径6.3cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し，外面には回転ヘラ削りを加え，外面の一部には青磁釉がかかる。釉調は灰オリーブ色，生地はにぶい黄色を呈し，胎土はやや粗く，焼成は良好である。

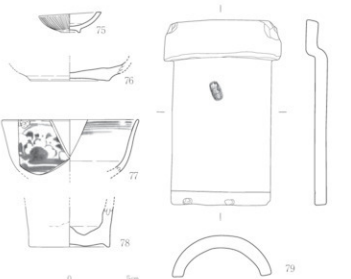


Fig.37　TR－7　SD－1・2出土遺物実測図

瓦(Fig.37－79)

79は丸瓦で，ほぼ完存し，全長29.4cm，筒部幅14.8cm，玉縁幅18.6cm，厚さ2.0cmを測る。調整は凸面と玉縁部は丁寧なナデでキラ粉が付着し，凹面はナデである。凸面には「御瓦師」の銘がみられる。色調は凹面が黄灰色，凸面が褐灰色または黄灰色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

8. TR－8

TR－8はTR－7の西に設定した東西トレンチで，丸ノ内緑地の北西部に位置する。上層では近代とみられる石列を2列，下層では近世前期の土坑やピット，鍛冶関連遺構などを検出した。

(1) 層序

第Ⅰ層は現表土で，芝生が敷かれていた。トレンチ東部では地表下 1.10m まで著しく撹乱を受けていた。

第Ⅱ～Ⅶ層は近代から現代にかけての整地層で，特に第Ⅴ・Ⅶ層は客土とみられ，堅く締まる。

第Ⅷ層は近代から現代にかけての堆積層で，非常に多量のコンクリートが入る。

第Ⅸ層は多量の瓦や0.80m大の礫や石材などがみられ，近代の瓦溜まりとみられる。

第Ⅹ・ⅩⅠ層は近代の整地層，第Ⅻ～ⅩⅣ層は近世後期の整地層または堆積層とみられる。

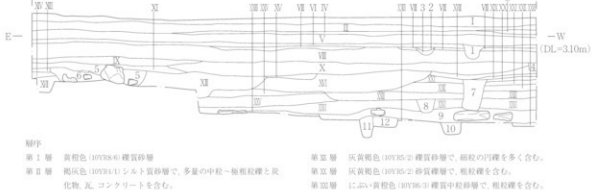
第ⅩⅤ層は近世前期の遺物包含層，第ⅩⅥ層は近世前期の整地層である。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

土師質土器(Fig.39－80)

80は羽釜で，口縁部の一部が残存する。口縁部外面には断面三角形の鍔を貼付する。調整は胴部内



層序

第Ⅰ層　黄橙色 (10YR8/6) 礫質砂層

第Ⅱ層　褐灰色 (10YR4/1) シルト質砂層で，多量の中粒～極粗粒礫と炭化物，瓦，コンクリートを含む。

第Ⅲ層　灰褐色 (7.5YR4/2) 礫質砂層で，細粒～粗粒の浅黄橙色礫を含む。

第Ⅳ層　褐灰色 (10YR6/1) 砂質礫層で，細粒礫を非常に多く含む。

第Ⅴ層　明黄褐色 (2.5Y7/6) 砂質シルト層で，僅かに炭化物を含み，締まる。(整地層)

第Ⅵ層　褐灰色 (10YR3/3) 砂質シルト層で，細粒～中礫を含む。

第Ⅶ層　明黄褐色 (10YR6/6) 砂質で，締まる。(整地層)

第Ⅷ層　灰黄褐色 (10YR5/2) 礫質砂層で，中粒礫～人礫とコンクリートを非常に多く含む。

第Ⅸ層　灰褐色 (7.5YR4/2) 礫質砂層で，多量の細粒明赤褐色礫と炭化物を含む。

第Ⅹ層　灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト層で，多量の細粒～粗粒礫と炭化物を含む。

第Ⅺ層　灰黄褐色 (10YR5/2) 礫質砂層で，多量の中粒～極粗粒礫と瓦を含む。

第Ⅻ層　灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質礫層で，極粗粒の円礫と瓦を多量に含む。

第ⅩⅢ層　灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト層で，橙色シルトのブロックと瓦を含む。

第ⅩⅣ層　橙色 (2.5YR6/6) シルト層で，中粒礫を含み，非常に締まる。(整地層)

第ⅩⅤ層　褐灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト層で，極粗粒礫と瓦を含む。

第ⅩⅥ層　にぶい黄色 (2.5Y6/3) 礫質砂層で，極粗粒礫を多く含み，瓦が少量入る。

第ⅩⅦ層　褐灰色 (10YR4/1) 礫質砂層で，極粗粒礫を含む。

第ⅩⅧ層　橙色 (7.5YR6/6) 砂質シルト層で，細粒～粗粒礫を含み，締まる。(整地層)

第ⅩⅨ層　灰黄褐色 (10YR5/2) 礫質砂層で，細粒の灯礫を多く含む。

第ⅩⅩ層　灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質礫層で，粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅠ層　にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト層で，橙色細粒礫を多く含む。

第ⅩⅩⅡ層　暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト層で，中粒礫と粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅢ層　黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト層で，細粒礫と粗粒礫を含む。

第ⅩⅩⅣ層　暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト層で，細粒礫と橙色細粒礫，細粒～極粗粒礫，炭化物を含む。

第ⅩⅩⅤ層　黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質シルト層で，中粒礫と多量の炭化物を含む。

第ⅩⅩⅥ層　褐灰色 (10YR6/1) 粘土質シルト層で，粗粒砂を含む。

第ⅩⅩⅦ層　にぶい褐色 (7.5YR5/4) 砂質シルト層で，粗粒砂と中粒礫を含む。(整地層)

遺構埋土

1. 褐灰色 (10YR4/1) シルト質砂で，炭化物とコンクリートを含む。
2. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト質砂で，炭化物を含む。
3. 明黄褐色 (10YR7/6) シルト質砂
4. 灰黄褐色 (10YR5/2) 礫質砂で，中粒～極粗粒礫を含む。
5. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルトで，粗粒礫と瓦，漆喰を含む。
6. 黄橙色 (10YR8/6) 砂質礫で，粗粒礫と漆喰を含む。
7. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質礫で，極粗粒礫を含む。
8. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルトで，極粗粒礫と炭化物を含む。
9. 褐色 (10YR4/4) 砂質シルトで，多量の細粒礫と炭化物を含む。(SD－1)
10. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルトで，明黄褐色砂のブロックと炭化物を含む。
11. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルトで，細粒礫と多量の炭化物を多く含む。
12. 褐灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質細粒砂で，極細粒礫を含む。

Fig.38　TR－8南壁セクション図

面が横方向のナデ，口縁部がヨコナデ，胴部外面はナデ調整で，指頭圧痕が残り，下部には斜め方向のタタキを施し，煤が付着する。色調は内面が橙色，外面が橙色または灰褐色を呈し，胎土はやや粗く，砂粒を多く含み，焼成は良好である。

陶器(Fig.39－81)

81は唐津焼の皿で，底部が完存し，口径11.4cm，器高3.4cm，底径4.4cmを測る。調整は回転ナデで，底部には削り出し高台を有し，見込には目跡が残る。内面と口縁部外面には釉を施すが，被熱しており釉には光沢がなく，灰白色を呈する。胎土はやや密で，焼成は良好である。

古銭(Fig.39－82)

82は寛永通宝で，新寛永である。完存し，銭径2.30cm，孔径0.66cm，銭厚0.15cmを測る。全面に錆化がみられる。

第Ⅺ層出土遺物

土製品(Fig.39－83)

83は泥面子で，完存し，径2.3cm，全厚0.8cmを測る。全面にナデ調整を施し，指頭圧痕が残る。上面には丸に帽子を着た紳士が型押しされ，キラ粉が付着する。色調は橙色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

第Ⅻ層出土遺物

磁器(Fig.39－84)

84は初期伊万里の中皿で，底部の約1/3が残存し，底径8.3cmを測る。底部は削り出し高台を有し，碁笥底状となり，外面には成形の痕跡が顕著に残る。全面に透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行い，見込には草花文の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

第ⅩⅢ層出土遺物

陶器(Fig.39－85)

85は唐津系の皿で，口縁部の約1/8が残存し，口径33.8cmを測る。調整は回転ナデで，全面に灰釉を施す。釉調，生地とも灰黄色を呈し，胎土はやや粗く砂粒を含み，焼成は良好である。

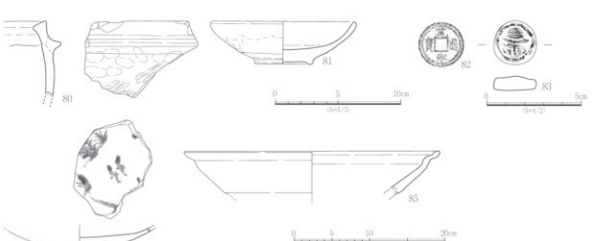


Fig.39　TR－8堆積層出土遺物実測図(土師質土器・陶器・磁器・土製品・古銭)

(3) 検出遺構

下層検出遺構

トレンチ東部は上層で石列が確認されたため，トレンチ西部のみ第Ⅷ層まで掘り下げた。殆どの遺構は，近世前期の遺物包含層である第Ⅷ層の下で検出された。

① 土坑

SK－1 (Fig.41)

第Ⅷ層の上で検出した土坑で，北端はトレンチ外へ続く。SK－2に切られる。隅丸方形を呈するものとみられ，長辺1.46m，短径1.28m，深さ0.62mを測る。断面は方形を呈し，底は平らで，肩は直に立ち上がる。埋土は6層に分れ，埋土3は炭化物を多量に含み，埋土6には木片が多く含まれていた。出土遺物には土師質土器片111点，瓦質土器片2点，陶器片12点，土製品9点，鉄釘片1点，平瓦，丸瓦(コビキB)，鉄滓がみられ，土師質土器18点(86・88～90・92～98・100～106)，瓦質土器1点(91)，陶器1点(87)，土製品1点(99)が図示できた。

埋土1出土遺物

土師質土器(Fig.42－86)

86は皿で，一部を欠損する。器壁が厚く，口縁部は内湾する。ロクロ水挽成形とみられ，調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。内底面と口縁部内外面には煤が付着する。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土はやや粗く砂粒を多く含み，焼成は良好である。

陶器(Fig.42－87)

87は唐津焼の皿で，底部の一部が残存し，底径4.8cmを測る。底部には削り出し高台を有し，内面と外面の高台付近まで灰釉を施す。見込には一部鉄絵がみられる。釉調はオリーブ灰色，生地は灰白色を呈し，胎土はやや密で，焼成は良好である。

埋土3出土遺物

土師質土器(Fig.42－88～90)

88～90は皿で，88は口縁部が直線的に伸びるもの，89・90は口縁部が内湾するものである。調整はいずれも回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。88は底部の約1/3，口縁部の約1/8が残存するもので，回転ナデ調整の後，内底面にナデ調整を加える。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。89は一部を欠損する。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土はやや粗く砂

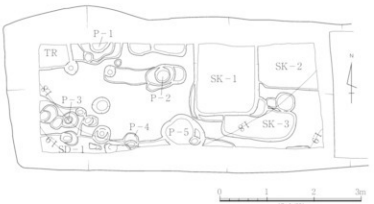


Fig.40　TR－8下層遺構平面図

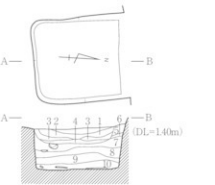


Fig.41　TR－8　SK－1

粒を多く含み，焼成は良好である。90は完存するもので，ロクロ水挽成形とみられる。口縁部の内外面には煤が付着する。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し，胎土はやや粗く砂粒を多く含み，焼成はやや良好である。

瓦質土器(Fig.42－91)

91は鉢とみられ，口縁部の一部が残存する。調整は横方向のナデで，器面には炭素が吸着する。色調は内外面とも灰色を呈し，胎土はやや粗く砂粒を多く含み，焼成は良好である。

埋土4出土遺物

土師質土器(Fig.42－92～98)

92～96は皿で，92は口縁部が直線的に伸び，93～96は口縁部が内湾する。いずれも回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。92は約1/4が残存する。粘土紐巻き上げ成形とみられ，口縁部内外面に煤が付着する。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土は密で，焼成はやや良好である。93はほぼ完存する。回転ナデ調整の後，内底面にナデ調整を加え，口縁部内外面に煤が付着する。色調は内

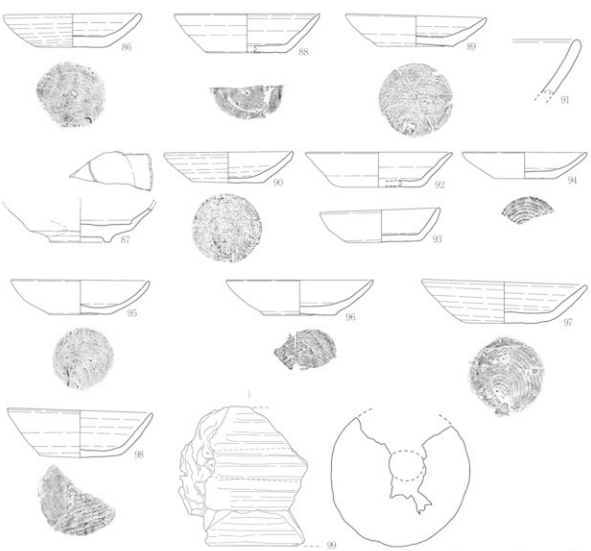


Fig.42　TR－8　SK－1出土遺物実測図1

面がにぶい褐色，外面がにぶい橙色を呈し，胎土は密で，焼成はやや良好である。94は約1/4が残存する。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成は良好である。95は約1/4が残存する。ロクロ水挽成形とみられ，口縁部内外面に煤が付着する。色調は内面が橙色，外面がにぶい橙色を呈し，胎土は密で赤色礫を多く含み，焼成はやや良好である。96は約1/4が残存する。回転ナデ調整の後，内底面にナデ調整を加える。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成は良好である。

97・98は杯で，いずれも口縁部が直線的に伸び，ロクロ水挽成形とみられ，調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。97は一部を欠損し，口縁部内外面に煤が付着する。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成は良好である。98は約3/4が残存する。回転ナデ調整の後，内底面にナデ調整を加え，底部外面には板状圧痕が残る。色調は内面が橙色，外面がにぶい橙色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

土製品(Fig.42－99)

99はフイゴの羽口で，一部が残存し，残存長8.0㎝，直径11.0㎝，円孔径2.0～2.7㎝を測る。外面には木型の様な痕跡が残り，先端には溶解した金属が付着する。色調は橙色または灰色を呈し，胎土は粗く0.8㎝大の礫を含み，焼成はやや良好である。

埋土6出土遺物

土師質土器(Fig.43－100～106)

100～105は皿で，102・103は口縁部が直線的に伸びるもの，104・105は口縁部が内湾するものである。調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。100は底部の約3/4が残存する。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土はやや密で，焼成は良好である。101は底部がほぼ完存する。内面は著しく摩耗するため，調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成は良好である。102は底部が完存，口縁部が約1/6残存する。調整は回転ナデの後，内底面にナデを加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成は良好である。103は底部が完存，口縁部が約1/4残存する。調整は回転ナデの後，内底面にナデを加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成は良好である。104は底部が完存，口縁部が約1/2残存する。調整は回転ナデの後，内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成は良好である。105は底部が完存，口縁部が約1/3残存する。色調は内面がにぶい黄橙色，外面が灰黄褐色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

106は杯で，底部が約3/4残存する。調整は回転ナデの後，内底面にナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙

Table.1　TR－8　SK－1土師質土器法量表

図版番号	口径(㎝)	器高(㎝)	底径(㎝)
86	10.7	2.7	5.2
88	11.0	2.9	5.9
89	10.1	2.5	5.7
90	11.4	3.1	6.0
92	11.6	2.8	7.0
93	9.3	2.7	5.9
94	9.8	2.1	4.6
95	10.8	2.8	5.0
96	11.6	2.8	5.3
97	12.8	3.4	6.0
98	11.3	4.0	6.6
100	－	－	4.6
101	－	－	4.9
102	10.2	2.3	5.0
103	9.8	2.2	4.7
104	9.0	2.0	4.4
105	10.0	2.1	4.8
106	－	－	6.3

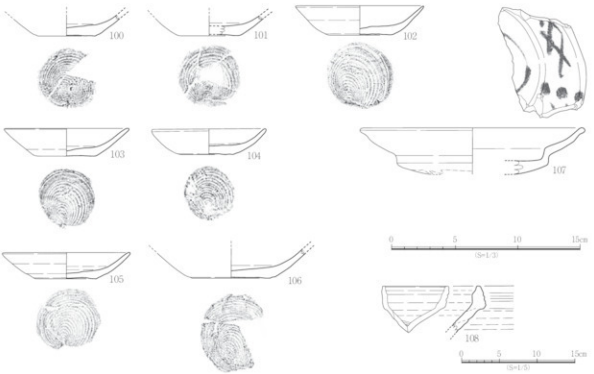


Fig.43　TR－8 SK－1出土遺物実測図2

色または褐灰色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成は良好である。

陶器(Fig.43－107・108)

107は唐津焼の折縁皿で，口縁部の約1/5が残存し，口径17.5cmを測る。調整は回転ナデで，外面体部下半には回転ヘラ削りを施す。内面と外面の体部下半まで灰釉を施す。釉調は灰色で，生地はにぶい褐色を呈し，胎土はやや密で，焼成は良好である。108は備前焼の擂鉢で，口縁部の一部が残存する。粘土紐巻き上げ成形で，器面には回転ナデ調整を施す。内面には斜め方向の擂り目が一部残存する。色調は内面が灰褐色または赤褐色，外面が灰赤色または褐灰色を呈し，胎土はやや粗く，焼成は良好である。

SK－2

第Ⅲ層の上で検出した土坑で，SK－1を切る。溝状を呈するとみられる土坑で，検出長2.60m，幅0.98m，深さ23cmを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は4層に分れる。出土遺物には土師質土器片24点，瓦質土器片1点，青磁1点，陶器片3点，古銭1点，平瓦がみられ，土師質土器2点(109･110)，青磁(111)，陶器1点(112)，古銭(113)が図示できた。

埋土1出土遺物

土師質土器(Fig.46－109・110)

109・110は杯で，器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切りである。109は底部の約1/2が残存し，底径7.2cmを測る。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し，胎土はやや粗く砂粒を多く含み，焼成は良好である。110は底部の約1/4が残存し，底径5.6cmを測る。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

青磁(Fig.46－111)

111は稜花皿で，口縁部の一部が残存する。内面には片彫りの花文がみられ，全面に約0.5mmの厚さ

に釉を施す。釉調はオリーブ色，生地は灰色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

陶器(Fig.46－112)

112は備前焼の擂鉢で，底部の約1/5が残存し，底径13.6cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し，底部外面は未調整である。内面には12本単位の放射状の擂り目の後，幅の広い斜め方向の擂り目を施す。色調は内外面とも灰赤色，胎土はやや密で，焼成は良好である。

埋土2出土遺物

古銭(Fig.46－113)

113は行書体の聖宋元寶で，完存し，銭径2.46cm，孔径0.67cm，銭厚0.12cmを測る。全面に銹化がみられる。北宋銭で，初鋳造年は1101年である。

SK－3(Fig.44)

第Ⅲ層の上で検出した土坑で，SK－1を切る。隅丸方形を呈し，長辺1.54m，短辺0.71m，深さ14cmを測る。断面は船底形で，埋土は2層に分れる。出土遺物には土師質土器片6点，平瓦がみられ，埋土2より出土した土師質土器1点(114)が図示できた。

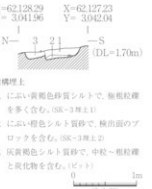


Fig.44　TR－8　SK－3 セクション図

出土遺物

土師質土器(Fig.46－114)

114は皿で，約1/5が残存し，口径9.5cm，器高2.3cm，底径5.1cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切りである。内面には煤が付着する。色調は内外面ともにぶい黄橙色，胎土はやや密で，焼成はやや良好である。

② 溝跡

SD－1(Fig.45)

第Ⅲ層の上で検出した東西溝跡(N－76°－E)で，南側の肩はトレンチ外へ続く。検出長4.11m，深さ4cmを測り，断面は船底形を呈する。埋土には石灰岩が2個みられ，南側に面をもつ石列である可能性が高い。埋土は褐色砂質シルトで，多量の細粒礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点，磁器片2点，石製品1点，平瓦，丸瓦がみられ，石製品(115)が図示できた。

Fig.45　TR－8　SD－1 セクション図

出土遺物

石製品(Fig.46－115)

115は石臼の上臼で，約1/8が残存し，残存長17.0cm，全厚8.2cmを測る。下面は中央が突起し，6本単位の斜行する擂り目がみられ，擂り目は著しく摩耗する。石材は砂岩である。

③ ピット

P－1

トレンチ北西部で検出された柱穴で，第Ⅲ層より掘り込みが認められる。北側はトレンチ外へ続き，検出長0.78m，深さ0.41cmを測る。柱穴は楕円形を呈し，長径0.44m，短径19cm，深さ0.80mを測る。埋土は掘方が黄灰色シルト，柱穴が黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点，砥石片

1点，平瓦がみられたが，復元図示できるものはなかった。

P－2

第Ⅲ層の上で検出した柱穴で，楕円形を呈し，長径0.52m，短径0.43m，深さ7cmを測る。円形の柱穴を有し，径0.32m，深さ29cmを測る。埋土は掘方が褐灰色シルト，柱穴が黄灰色シルトでいずれも橙色の細粒礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点，陶器1点，平瓦，丸瓦がみられ，柱穴より出土した陶器(116)が図示できた。

出土遺物

陶器(Fig.46－116)

116は備前焼の擂鉢で，口縁部の約1/8が残存し，口径30.4cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し，内面には放射状と斜め方向の擂り目の一部が残る。色調は内外面とも灰褐色を呈し，胎土はやや粗く，焼成は良好である。

P－3

第Ⅲ層の上で検出した柱穴で，楕円形を呈し，長径0.39m，短径0.32m，深さ12cmを測る。円形の柱穴を有し，径16cm，深さ8cmを測る。埋土は掘方が黄灰色シルトで炭化物を含んでおり，柱穴が黄灰色シルトで，橙色の細粒礫を含んでいた。出土遺物には図示した陶器1点(117)が掘方より出土している。

出土遺物

陶器(Fig.46－117)

117は備前焼の甕で，口縁部の一部が残存する。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内面が褐灰色，外面が灰褐色を呈し，胎土はやや密で白色の砂粒を多く含み，焼成は良好であった。

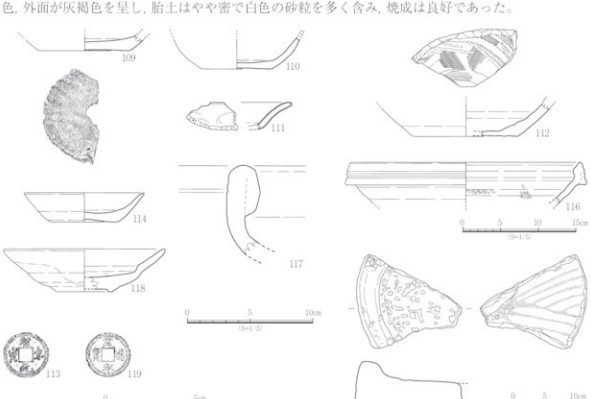


Fig.46　TR－8 SK－2・3，SD－1，ピット出土遺物実測図

P－4

第Ⅷ層の上で検出した柱穴で，SD－1を切る。掘方は楕円形を呈し，長径0.36m，短径0.32m，深さ21cmを測る。楕円形の柱穴を有し，長径25cm，短径16cm，深さ7cmを測る。埋土は掘方が黄褐色シルトで検出面のブロックと炭化物を含んでおり，柱穴が黄灰色シルトで炭化物を含んでいた。出土遺物には青磁片1点と陶器片2点がみられ，掘方より出土した陶器1点(118)が図示できた。

出土遺物

陶器(Fig.46－118)

118は唐津焼の皿で，約1/4が残存し，口径12.6cm，器高3.4cm，底径4.6cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し，底部には削り出し高台を有する。内面と外面の高台付近まで灰釉を施し，見込には1箇所に胎土目痕が残る。釉調は灰白色，生地はにぶい黄橙色を呈し，胎土はやや粗く黒色砂粒を含み，焼成は良好である。

P－5

第Ⅷ層の上で検出したピットで，SD－1を切る。楕円形を呈し，長径0.64m，短径0.62m，深さ15cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで粗粒礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点，平瓦，丸瓦がみられたが，復元図示できるものはなかった。

上層検出遺構

整地層である第Ⅶ層の上で検出した遺構である。トレンチ西部は撹乱を受けたものとみられ，第Ⅻ層中には多量の瓦と0.80m長の石材や礫が含まれており，近代の瓦溜まりとなっていた。

① ピット

P－6

第Ⅶ層の上で検出したピットで，隅丸方形を呈し，長辺0.54m，短辺0.38m，深さ0.30mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂で中粒砂と中粒礫，炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点，磁器片1点，古銭1点がみられ，古銭(119)が図示できた。

出土遺物

古銭(Fig.46－119)

119は寛永通宝で，新寛永である。完存し，銭径2.38cm，孔径0.68cm，銭厚0.12cmを測る。全面に錆化がみられる。

P－7

第Ⅶ層の上で検出したピットで，楕円形を呈し，長辺1.23m，短辺1.02m，深さ19cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで漆喰とハンダを含んでいた。出土遺物には陶器片2点，鉄釘片3点，瓦3点がみら

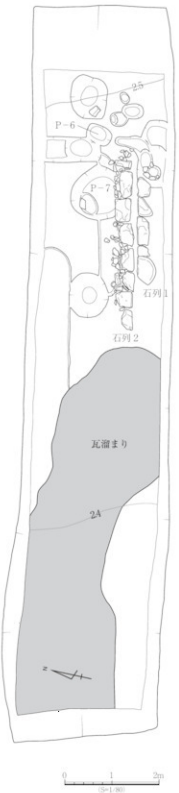


Fig.47　TR－8上層遺構平面図

れ，軒丸瓦(148)が図示できた。

② 石列

石列1(Fig.48)

東西方向(N－78°－E)の石列で，周囲を整地層である第Ⅻ層で固めている。検出長2.28mで，0.25～0.60m長の砂岩を5個確認した。石材は丸味を有するが，北側は直に加工され，面を持ち，上面はほぼ平らであった。

石列2(Fig.49)

東西方向(N－78°－E)の石列で，第Ⅻ層中より検出された。石列1の北側に平行して走り，検出長3.57mで，0.35～0.50m長の石灰岩を8個確認した。石材は直方体に加工され，南側に面を持ち，上面はほぼ平らであった。東端の石は南北方向に置かれており，石列の東端であるものとみられる。一部では幅0.95m以上の布掘りがみられ，埋土はにぶい黄色粘土質シルトで，第Ⅻ層のブロックと粗粒礫が含まれていた。また，若干の裏込めがみられ，5～25㎝大の石灰岩または砂岩の角礫が入っていた。裏込めの出土遺物には平瓦片1点がみられたが，復元図示できなかった。

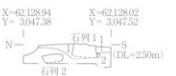


Fig.48 TR－8石列1・2 セクション図

Fig.49 TR－8石列2 セクション図

9. TR－9

TR－9はTR－8の南約11mに設定した東西トレンチである。近世前期の土坑と，近世後期の土坑，溝跡などを確認している。

(1) 層序

第Ⅰ層は表土層，第Ⅱ～Ⅴ層は近代～現代にかけての土層で，第Ⅴ層には多量のコンクリートが入る。

第Ⅵ～Ⅹ層は近世後期の堆積層である。第ⅩⅣ・ⅩⅤ層は下層確認トレンチでのみ確認した土層で，第ⅩⅣ層からは近世前期の遺物が出土している。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅵ層出土遺物

陶器(Fig.51－120)

120は肥前系の皿で，底部の約1/2が残存し，底径5.0㎝を測る。器面には回転ナデ調整を施し，底部には削り出し

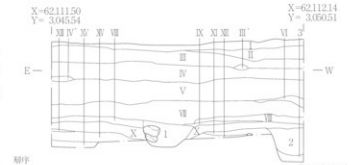


Fig.50 TR－9南壁セクション図

高台を有する。内面と外面の一部に銅緑釉を施し，見込には蛇ノ目釉ハギを行う。釉調は緑灰色，生地は灰白色または淡黄色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

第Ⅹ層出土遺物

土師質土器(Fig.51－121・122)

121は皿で，底部が完存し，底径5.1cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明で，底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも橙色またはにぶい橙色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成は良好である。122は焜炉で，口縁部の約1/3が残存し，口径18.0cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し，外面は丁寧なナデ調整を加える。残存部には4箇所に径約1.0cmの円孔がみられ，内面には1箇所に角状突起が剥落した痕跡が残る。色調は内外面とも黄橙色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

磁器(Fig.51－123)

123は肥前系の皿で，約1/4が残存し，口径10.9cm，器高1.9cm，底径6.1cmを測る。全面に透明釉を薄く施し，畳付を釉ハギする。内面には蝶と山水文とみられる染付を施す。胎土は密で，焼成は良好である。

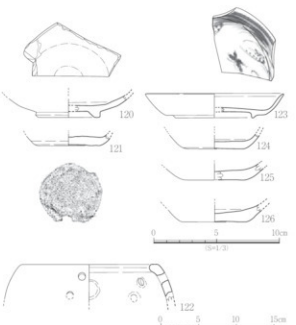


Fig.51　TR－9堆積層出土遺物実測図
(土師質土器・陶器・磁器)

第Ⅻ層出土遺物

土師質土器(Fig.51－124)

124は皿で，底部の約1/5が残存し，底径4.8cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明で，底部の切り離しは回転糸切りである。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成はやや良好である。

第Ⅺ層出土遺物

土師質土器(Fig.51－125・126)

125・126は皿である。器面は著しく摩耗するため調整は不明で，底部の切り離しは回転糸切りである。125は底部の約1/4が残存し，底径5.0cmを測る。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し，胎土は密で砂粒を含み，焼成は良好である。126は底部の約1/4が残存し，底径5.2cmを測る。色調は内外面とも橙色を呈し，胎土は密で赤色礫を含み，焼成は良好である。

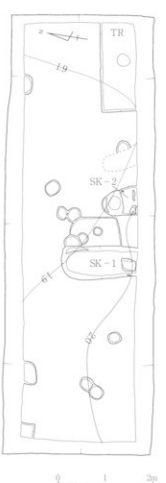


Fig.52　TR－9下層遺構平面図

(3) 検出遺構と遺物

下層検出遺構

① 土坑

SK－1 (Fig.53)

第X層の下で検出した土坑で，隅丸方形を呈し，長辺1.59m，短辺0.69m，深さ0.38mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は2層に分かれ，上層は暗褐色粘土質シルトで，灰色粘土質シルトブロックと石灰岩，玉砂利を含み，下層はにぶい黄褐色粘土質シルトで，中粒礫を含んでいた。出土遺物には青花片(景徳鎮)1点，磁器1点，丸瓦がみられ，上層から出土した磁器(127)が図示できた。

出土遺物

磁器(Fig.54－127)

127は初期伊万里の皿で，底部の約1/2が残存し，底径6.0cmを測る。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギを行い，砂粒が付着する。内面には圏線と文様不明の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

SK－2

第X層の下で検出した土坑で，楕円形を呈するものとみられ，長径0.74m，短径0.69m，深さ7cmを測る。断面は舟底形を呈し，埋土は2層に分かれ，上層は灰黄褐色粘土質シルトで，検出面には4石が一列に並んでいた。下層は暗褐色粘土質シルトで中粒礫を含んでいた。出土遺物には陶器片1点，平瓦，桟瓦がみられたが，復元図示できるものはなかった。

上層検出遺構

① 土坑

SK－3

第Ⅶ層の下で検出した土坑で，隅丸方形を呈し，長辺1.61m，短辺0.52m，深さ7cmを測る。断面は舟底形を呈し，埋土は暗褐色粘土質シルトで，中粒礫と5cm大の河原石を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

② 溝跡

SD－1 (Fig.56)

第Ⅶ層の下で検出した東西溝跡(N－76°－E)で，検出長3.54m，

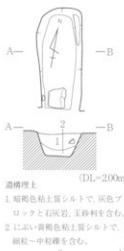


Fig.53 TR－9 SK－1

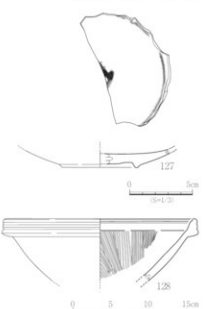


Fig.54 TR－9 SK－1，SD－1 出土遺物実測図

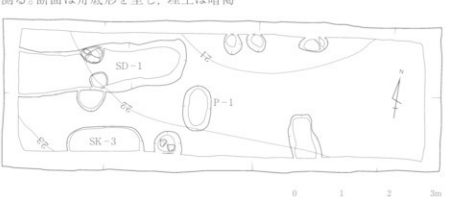


Fig.55 TR－9上層遺構平面図

幅0.94m，深さ25cmを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は暗褐色粘土質シルトで，中粒礫と5cm大の河原石，石灰岩，炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片9点，陶器片7点，磁器片8点，鉄釘片7点，平瓦，丸瓦がみられ，陶器1点(128)が図示できた。

出土遺物

陶器(Fig54－128)

128は擂鉢で，口縁部の約1/8が残存し，口径24.7cmを測る。調整は回転ナデで，内面には9本単位の擂り目を上方から下方に施し，外面には鉄釉を施す。釉調，生地ともにぶい赤褐色を呈し，胎土はやや粗く白色礫を含み，焼成は良好である。

③ ピット

P－1

第Ⅶ層の下で検出した楕円形を呈するピットで，長径0.93cm，短径0.58cm，深さ17cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトで中粒礫と5cm大の河原石を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点，陶器片1点，磁器片2点，平瓦，丸瓦，軒平瓦がみられたが，復元図示できるものはなかった。

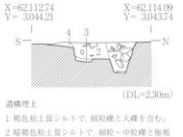


Fig.56　TR－9 SD－1 セクション図

10. TR－10

TR－10はTR－9の南約10mに設定した東西トレンチである。第Ⅻ層の下で，近世後期の遺構を確認した。

(1) 層序

第Ⅰ・Ⅱ層は表土層，第Ⅲ～Ⅴ層は客土で，整地層である。

第Ⅵ～Ⅻ層は近代から現代にかけての堆積層で，第Ⅷ層と第Ⅻ層には石灰岩の石列が南北に伸びる。トレンチ西部では第Ⅴ層の下から掘乱を受けていた。

第Ⅻ層は近世後期とみられる堆積層である。

第ⅩⅠ層は下層確認トレンチでのみ確認した層で，自然堆積層である。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅷ層出土遺物

磁器(Fig58－129)

129は蓋で，つまみが完存し，つまみ径4.3cmを測る。全面に透明釉を施し，つまみ端部を釉ハギし，外面には文様不明の染付，

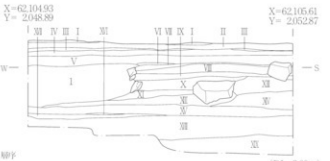


Fig.57　TR－10北壁セクション図

内面には圏線内に葉と蔓の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

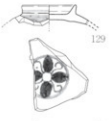


Fig.58　TR－10 第Ⅷ層出土遺物実測図(磁器)

(3) 検出遺構

遺構はいずれも第Ⅷ層の下で検出し，近世後期のものとみられる。

① 塀・柵列跡

SA－1

L字状を呈する塀跡で，東西4間(2.17m)，南北3間(1.65m)を検出した。柱穴は径0.25～0.53mを測る円形または楕円形で，柱間は0.45～0.63mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで，出土遺物は土師質土器片7点，平瓦3点，鉄釘片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

② 土坑

SK－1

トレンチ北端で検出した土坑で，北と東はトレンチ外へ続く。楕円形を呈するものとみられ，長径1.21m，短径0.43m，深さ10cmを検出した。断面は船底形を呈し，埋土は灰褐色粘土質シルトで，褐灰色粘土質シルトブロックと中粒礫，炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片1点，丸瓦1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

③ 溝跡

SD－1

南北溝跡(N－11°－W)で，検出長2.03m，幅1.11m，深さ11cmを測り，両端はトレンチ外へ続く。断面は逆台形を呈し，埋土は褐色粘土質シルトであった。出土遺物には陶器片1点，磁器片2点，青花片(景徳鎮)1点，平瓦2点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

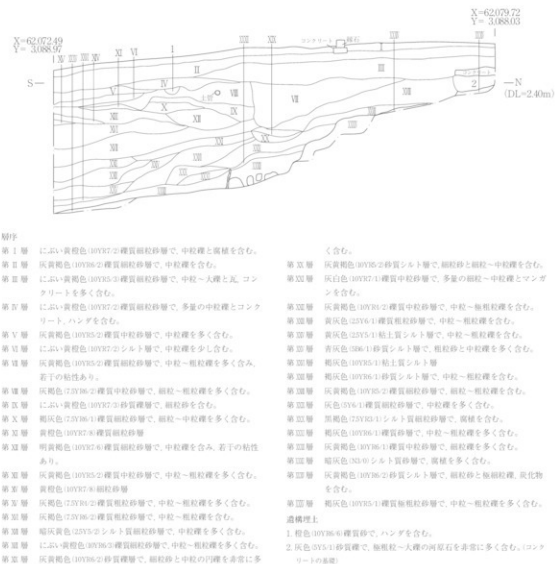
Fig.59　TR－10遺構平面図

11. TR－11

TR－11は丸ノ内緑地南東部に設定した南北トレンチで，南側の旧の堀の位置を確認するために設定した。土手状遺構を確認したほか，堀を埋めた際に土留めとして使用したとみられる杭列を確認した。

(1) 層序

第Ⅰ～Ⅲ層は昭和期の公園整備の際の客土とみられ，第Ⅲ層にはコンクリートが非常に多くみられる。第Ⅳ～Ⅷ層は明治7年に堀の一部が埋められた際の土層とみられる。第Ⅷ層以下は南に傾斜する。



層序

第Ⅰ層　にぶい黄橙色(10YR7/2)礫質細粒砂層で、中粒礫と腐植を含む。
第Ⅱ層　灰黄褐色(10YR6/2)礫質細粒砂層で、中粒礫を含む。
第Ⅲ層　にぶい黄褐色(10YR5/3)礫質細粒砂層で、中粒～大礫と瓦、コンクリートを多く含む。
第Ⅳ層　にぶい黄橙色(10YR7/2)礫質細粒砂層で、多量の中粒礫とコンクリート、ハンダを含む。
第Ⅴ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質中粒砂層で、中粒礫を多く含む。
第Ⅵ層　にぶい黄橙色(10YR7/2)シルト層で、中粒礫を少し含む。
第Ⅶ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質細粒砂層で、中粒～粗粒礫を多く含み、若干の粘性あり。
第Ⅷ層　灰褐色(7.5YR6/2)礫質中粒砂層で、細粒～粗粒礫を多く含む。
第Ⅸ層　にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質礫層で、細粒砂を含む。
第Ⅹ層　褐灰色(7.5YR6/1)礫質細粒砂層で、細粒～中粒礫を多く含む。
第Ⅺ層　黄橙色(10YR7/8)礫質細粒砂層
第Ⅻ層　明黄褐色(10YR7/6)礫質細粒砂層で、中粒礫を含み、若干の粘性あり。
第ⅩⅢ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質中粒砂層で、中粒～粗粒礫を多く含む。
第ⅩⅣ層　黄橙色(10YR7/8)細粒砂層
第ⅩⅤ層　灰褐色(7.5YR4/2)礫質粗粒砂層で、中粒～粗粒礫を含む。
第ⅩⅥ層　灰褐色(7.5YR6/2)礫質粗粒砂層で、中粒～粗粒礫を含む。
第ⅩⅦ層　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細粒砂層で、中粒礫を多く含む。
第ⅩⅧ層　にぶい黄橙色(10YR6/3)礫質細粒砂層で、中粒～粗粒礫を多く含む。
第ⅩⅨ層　灰黄褐色(10YR6/2)砂質礫層で、細粒砂と中粒の凹礫を非常に多く含む。
第ⅩⅩ層　灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト層で、細粒砂と細粒～中粒礫を含む。
第ⅩⅩⅠ層　灰白色(10YR7/1)礫質中粒砂層で、多量の細粒～中粒礫とマンガンを含む。
第ⅩⅩⅡ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質中粒砂層で、中粒～粗粒礫を含む。
第ⅩⅩⅢ層　黄灰色(2.5Y6/1)礫質粗粒砂層で、中粒～粗粒礫を含む。
第ⅩⅩⅣ層　黄灰色(2.5Y5/1)粘土質シルト層で、中粒～粗粒礫を含む。
第ⅩⅩⅤ層　青灰色(5B6/1)砂質シルト層で、粗粒砂と中粒礫を多く含む。
第ⅩⅩⅥ層　褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト層
第ⅩⅩⅦ層　褐灰色(10YR6/1)砂質シルト層で、中粒～粗粒礫を含む。
第ⅩⅩⅧ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質細粒砂層で、細粒～粗粒礫を含む。
第ⅩⅩⅨ層　灰色(5Y6/1)礫質細粒砂層で、中粒礫を多く含む。
第ⅩⅩⅩ層　黒褐色(7.5YR3/1)シルト質細粒砂層で、腐植を含む。
第ⅩⅩⅩⅠ層　褐灰色(10YR6/1)礫質中粒砂層で、中粒～粗粒礫を多く含む。
第ⅩⅩⅩⅡ層　灰黄褐色(10YR6/1)礫質中粒砂層で、細粒礫を多く含む。
第ⅩⅩⅩⅢ層　暗灰色(N3/0)シルト質砂層で、腐植を多く含む。
第ⅩⅩⅩⅣ層　灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト層で、細粒砂と極細粒礫、炭化物を含む。
第ⅩⅩⅩⅤ層　褐灰色(10YR5/1)礫質極粗粒砂層で、中粒～粗粒礫を多く含む。

遺構埋土
1. 橙色(10YR6/6)礫質砂で、ハンダを含む。
2. 灰色(5Y5/1)砂質礫で、極粗粒～大礫の両原石を非常に多く含む。(コンクリートの基礎)

Fig.60　TR－11西壁セクション図

堀埋土の最下層である第ⅩⅩⅢ層は腐植を多く含み，北側の土手状遺構の裾付近には集石と土留めに使用したとみられる杭列を検出している。

第ⅩⅩⅢ層は土手状遺構となっていた層で，かなりの削平を受けているものとみられる。

第ⅩⅩⅢ層は堀の底であったとみられる層で，自然堆積層である。南に向かって下がっていくものとみられる。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

磁器(Fig.61－130)

130は能茶山焼の広東碗で，底部が完存し，底径6.2cmを測る。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギを行う。外面には圏線と文様不明の染付，見込には花文の染付，高台内には「サ」銘がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。

第Ⅴ層出土遺物

陶器(Fig.61－131)

131は肥前系の碗で，底部が完存し，底径5.3㎝を測る。器面には灰釉を施し，畳付は釉ハギを行う。釉調は浅黄色，生地は浅黄色または橙色を呈し，胎土はやや密で，焼成は良好である。

第Ⅶ層出土遺物

須恵器(Fig.61－132)

132は杯で，底部の約1/3が残存し，底径9.2㎝を測る。器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転ヘラ切りである。底部には断面方形の直立する高台を貼付する。色調は内外面とも灰色を呈し，胎土はやや粗く，焼成はやや良好である。

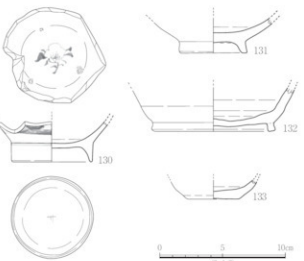


Fig.61　TR－11堆積層出土遺物実測図
（須恵器・土師質土器・陶器・磁器）

第Ⅷ層出土遺物

土師質土器(Fig.61－133)

133は小皿で，底部の約1/2が残存し，底径4.2㎝を測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。色調は内面がにぶい橙色，外面はにぶい黄橙色を呈し，胎土は密で，焼成は良好である。

(3) 検出遺構

① 土手状遺構

トレンチ北端で検出した遺構で，第Ⅷ層の南端が緩い階段状に削られ，土手状に残る。上部はコンクリートの基礎が残っており，削平されたものとみられ，高さ1.24mが残存する。第Ⅷ層は堀の埋土と異なり，非常に締まっており，古土壌であった可能性が高いが，第Ⅷ層からの出土遺物は皆無であった。

② 杭列

第Ⅷ層中で検出した杭列で，土手状遺構に平行して東西方向に２列走る。杭は径４～10㎝を測り，木材は松などの雑木であった。杭列は検出長0.55～0.60mを測り，杭列の間隔は0.8m，杭の間隔は約15～30㎝であった。これらの杭列は堀を埋める際に土留めとして使用されたとみられる。

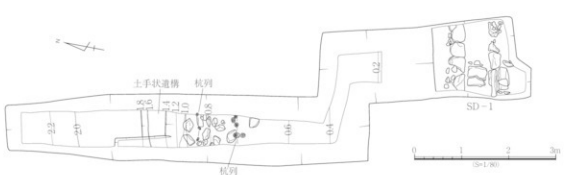


Fig.62　TR－11遺構平面図

③ 水路遺構

SD－1 (Fig.63)

トレンチ南端で確認した東西方向(N－78°－E)の石組みの水路遺構である。第Ⅱ層の下で確認し，堀の埋土を掘り込んでおり，近代から現代の遺構とみられる。現在の堀から1.90mの地点で検出し，現在の堀と平行に伸びる。検出長は2.04mを測り，両端はトレンチ外に伸びる。幅1.11m，深さ17cmを測り，埋土はにぶい黄褐色礫質細粒砂であった。また，水路遺構の西端の底は1段下がっており，深さ29cmを測り，南側は3石，北側は2石，東側は2石積んでいた。石材は大半が石灰岩で，少量の砂岩とチャートが使用されており，南肩の西端2石目の石材は花崗岩の切石で，転用されたものとみられる。出土遺物は皆無であった。

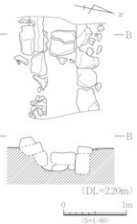


Fig.63　TR－11　SD－1

12. TR－12

TR－12は丸ノ内緑地南端に設定した南北トレンチで，TR－11の西約15mに位置する。TR－11同様，土手状遺構を確認したほか，堀を埋めた際に土留めとして使用したとみられる杭列を確認した。

(1) 層序

第Ⅰ～Ⅹ層は昭和期の公園整備の際の客土とみられ，第Ⅱ・Ⅲ層にはコンクリートが非常に多く入る。

第Ⅺ～Ⅺ層は明治7年に堀の一部が埋められた際の埋土とみられ，南に傾斜する。堀埋土の最下層である第ⅩⅢ層は腐植を多く含み，北側の土手状遺構の掘付近には10～30 cm大の礫を敷いており，また土留めに使用したとみられる杭列も検出している。

第ⅩⅠ～ⅩⅡ層は土手状遺構となっていた層で，第ⅩⅠ層は削平を受けているものとみられる。

第ⅩⅣ・ⅩⅤ層は自然堆積層である。

(2) 堆積層出土遺物

第ⅩⅩ層出土遺物

瓦(Fig.66－134)

134は丸瓦で，玉縁部と筒部の一部が残存する。凸面はナデ調整で，凹面は布目とコビキAの痕跡，縄目がみられる。色調は灰色を呈し，胎土はやや密で1cm大の礫を含み，焼成は良好であった。

第ⅩⅩⅠ層出土遺物

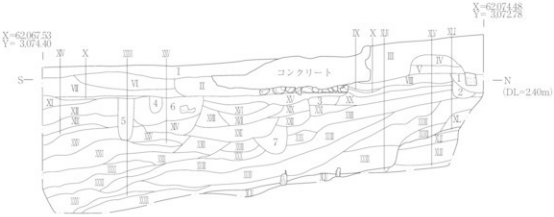
瓦質土器(Fig.66－135)

135は擂鉢で，口縁部の一部が残存する。調整は口縁部がヨコナデで，体部外面はナデで，指頭圧痕が残り，内面には擂り目が3条みられる。器面には炭素が吸着し，色調は内外面とも灰オリーブ色または灰色を呈し，胎土はやや密で，焼成は良好である。

陶器(Fig.66－136)

136は火鉢で，底部が完存し，底径15.2cmを測る。底部には3箇所に半球形の足を貼付し，足にはヘラ状工具の圧痕が放射状に残る。また底部外面には3箇所に円孔が残る。胴部外面には菊花文の押印がみられる。調整は回転ナデで，底部外面にはケズリを加え，外面に鉄釉を薄く施し，内面には鉄釉

12. TR－12



層序

第Ⅰ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質細粒砂層で，極粗粒礫と瓦を含む。
第Ⅱ層　灰褐色(7.5YR4/2)礫質細粒砂層で，コンクリートを含む。
第Ⅲ層　灰黄褐色(10YR4/2)砂質礫層で，細粒砂と多量の粗粒～極粗粒の円礫，漆喰，ハンダ，コンクリートを含む。
第Ⅳ層　にぶい黄褐色(10YR4/3)礫質細粒砂層で，中粒の円礫と瓦，焼土，炭化物，漆喰を含む。
第Ⅴ層　にぶい黄褐色(10YR5/3)礫質細粒砂層で，中粒礫を含み，若干の粘性あり。
第Ⅵ層　灰褐色(7.5YR4/2)礫質細粒砂層で，多量の大礫と瓦を含む。
第Ⅶ層　灰黄褐色(10YR6/2)礫質細粒砂層で，多量の細粒～中粒礫と瓦，ハンダを含む。
第Ⅷ層　灰褐色(7.5YR4/2)砂質シルト層で，細粒砂と細粒～中粒礫，炭化物，漆喰を含む。
第Ⅸ層　橙色(7.5YR7/8)礫質礫砂層で，ハンダを含む。
第Ⅹ層　灰褐色(7.5YR5/2)シルト質細粒砂層で，細粒～中粒礫を含む。
第Ⅺ層　灰黄褐色(10YR6/2)礫質細粒砂層で，中粒礫を含む。
第Ⅻ層　灰褐色(7.5YR5/2)礫質中粒砂層で，細粒～中粒礫を多く含む。
第XIII層　にぶい黄褐色(10YR5/3)礫質中粒砂層で，細粒～中粒礫を多く含み，若干の粘性あり。
第XIV層　にぶい黄褐色(10YR5/4)礫質細粒砂層で，中粒～極粗粒礫を含む。
第XV層　にぶい黄褐色(10YR5/3)礫質細粒砂層で，中粒～粗粒礫を多く含む。
第XVI層　灰褐色(7.5YR5/2)砂質礫層で，中粒砂と極粗粒～大礫を多く含む。
第XVII層　にぶい黄褐色(10YR5/3)礫質細粒砂層で，中粒～極粗粒礫を含む。
第XVIII層　灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂層で，細粒礫を多く含む。
第XIX層　褐灰色(10YR4/1)礫質中粒砂層で，細粒礫を多く含む。
第XX層　褐灰色(7.5YR5/1)砂質礫層で，粗粒砂と粗粒礫を含み，若干の粘性あり。
第XXI層　灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト層で，細粒砂と少量の中粒礫，瓦を含む。
第XXII層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質中粒砂層で，中粒～粗粒礫とハンダ，漆喰を含む。
第XXIII層　褐灰色(10YR5/1)シルト質中粒砂層で，細粒礫を含む。
第XXIV層　褐灰色(7.5YR4/1)礫質粗粒砂層で，細粒礫を多く含む。
第XXV層　にぶい黄橙色(10YR7/2)シルト層で，粗粒礫を少し含む。
第XXVI層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質中粒砂層で，多量の中粒礫を含み，若干の粘性あり。
第XXVII層　褐灰色(10YR5/1)礫質細粒砂層で，細粒～中粒礫を含む。
第XXVIII層　黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層で，細粒礫を少し含む。
第XXIX層　灰褐色(7.5YR4/2)礫質中粒砂層で，細粒礫と緑灰色シルトのブロックを含む。
第XXX層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質中粒砂層で，中粒礫を少し含み，若干の粘性あり。
第XXXI層　褐灰色(5YR4/1)粗粒砂層
第XXXII層　青灰色(10BG6/1)シルト層で，中粒砂と中粒礫を少し含む。
第XXXIII層　褐灰色(5YR5/1)礫質極粗粒砂層で，中粒礫を含み，下部にマンガンが堆積する。
第XXXIV層　褐灰色(10YR6/1)礫質中粒砂層で，中粒～粗粒の円礫を多く含む。
第XXXV層　にぶい黄褐色(10YR5/3)礫質極粗粒砂層で，中粒～粗粒礫を含む。
第XXXVI層　灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト層で，極細粒砂を含む。
第XXXVII層　褐灰色(7.5YR5/1)砂質礫層で，粗粒砂と粗粒礫を多く含む。
第XXXVIII層　褐灰色(10YR5/1)礫質粗粒砂層で，中粒～粗粒礫を含む。
第XXXIX層　褐灰色(5YR5/1)砂質礫層で，極粗粒砂と中粒～粗粒礫，腐植を多く含む。
第XL層　灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粗粒砂層で，細粒～中粒礫を含む。
第XLI層　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質極細粒砂層
第XLII層　褐灰色(7.5YR6/1)シルト層で，炭化物を含む。
第XLIII層　褐灰色(10YR6/1)砂質シルト層で，少量の細粒礫と炭化物，マンガンを含む。
第XLIV層　にぶい黄褐色(10YR5/3)礫質極粗粒砂層で，中粒～粗粒礫を含む。
第XLV層　灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト層で，極細粒砂を含む。

遺構埋土

1. 橙色(7.5YR6/6)礫質砂(ハンダ)
2. 灰褐色(7.5YR5/2)礫質中粒砂で，中粒～粗粒礫を含む。
3. 褐灰色(7.5YR5/1)砂質シルトで，細粒砂と炭化物を含む。
4. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質礫で，細粒砂と多量の細粒礫を含む。
5. 灰黄褐色(10YR5/2)砂質礫で，細粒砂と多量の細粒礫，ハンダを含む。
6. 灰黄褐色(10YR6/2)礫質細粒砂で，中粒～粗粒礫とハンダを含む。
7. にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質中粒砂で，細粒礫を多く含む。

Fig.64　TR－12西壁セクション図

をハケ塗りした後，内外面の胴部上半には銅緑釉を厚くかける。釉調は緑灰色または灰黄褐色，生地は灰白色を呈し，胎土はやや粗く，焼成は良好である。

瓦(Fig.66－137)

137は丸瓦で，筒部の一部が残存する。凸面はナデ調整で，凹面は布目とコビキＡの痕跡がみられる。色調は灰色を呈し，胎土はやや密で，焼成は良好であった。

(3) 検出遺構

① 土手状遺構

トレンチ北端で検出した遺構で，第Ⅻ・ⅩⅢ層の南端が人為的に削られ，土手状に残る。上部はコンクリートの基礎が残っており，削平されたものとみられ，高さ0.64mが残存する。第Ⅻ・ⅩⅢ層は堀の埋土と異なり，非常に締まっており，土壌化する。第ⅩⅢ層からは図示した東播系須恵器(138)1点が出土している。

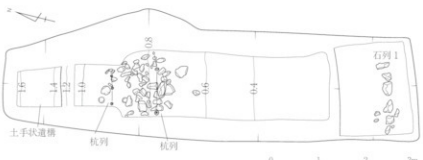


Fig.65　TR－12遺構平面図

東播系須恵器(Fig.66－138)

138は片口鉢で，口縁部の一部が残存する。器面には回転ナデ調整を施し，口縁部外面には重ね焼痕が残る。色調は内面が灰黄色，外面が灰色または灰白色を呈し，胎土はやや粗く砂粒を多く含み，焼成はやや良好である。

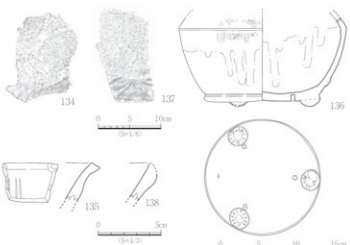


Fig.66　TR－12出土遺物実測図(東播系須恵器・瓦質土器・陶器・瓦)

② 杭列

第ⅩⅢ層中で検出した杭列で，土手状遺構に平行して東西方向に2列走る。杭は径5～10㎝を測り，木材は松などの雑木であった。杭列は検出長0.60～1.25mを測り，杭列の間隔は0.95m，杭の間隔は約25～30㎝であった。これらの杭列は堀を埋める際に土留めとして使用されたとみられる。

③ 石列

石列1

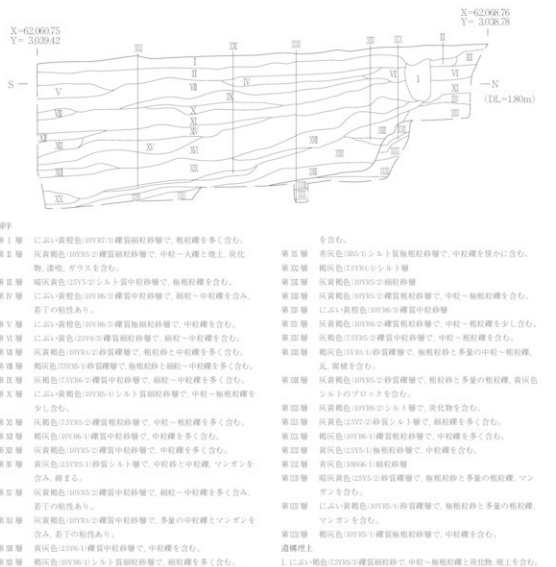
トレンチ南端で検出した東西方向(N－85°－E)の石列で，検出長1.54mを測る。石材はすべて石灰岩で，17～28㎝大の石が6個並んでいた。第Ⅺ層の上で検出しており，TR－11の水路遺構と同様に堀の埋土を掘り込んでおり，近代から現代にかけての遺構とみられる。

13. TR－13

TR－13は丸ノ内緑地南西に設定した南北トレンチで，TR－12の西約32mに位置する。TR－11・12同様，土手状遺構を確認したほか，堀を埋めた際に土留めとして使用したとみられる杭列を確認した。

(1) 層序

第Ⅰ～Ⅲ層は昭和期の公園整備の際の客土とみられる。



層序

第Ⅰ層　にぶい黄橙色(10YR7/3)礫質細粒砂層で，粗粒礫を多く含む。
第Ⅱ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質細粒砂層で，中粒～大礫と焼土，炭化物，漆喰，ガラスを含む。
第Ⅲ層　暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂層で，極粗粒礫を含む。
第Ⅳ層　にぶい黄橙色(10YR6/3)礫質中粒砂層で，細粒～中粒礫を含み，若干の粘性あり。
第Ⅴ層　にぶい黄橙色(10YR6/3)礫質細粒砂層で，中粒礫を含む。
第Ⅵ層　にぶい黄色(2.5Y6/3)礫質細粒砂層で，細粒～中粒礫を含む。
第Ⅶ層　灰黄褐色(10YR4/2)砂質礫層で，粗粒砂と中粒礫を多く含む。
第Ⅷ層　暗灰色(2.5Y3/1)砂質礫層で，極粗粒砂と細粒～中粒礫を多く含む。
第Ⅸ層　灰褐色(7.5YR6/2)礫質中粒砂層で，細粒～中粒礫を多く含む。
第Ⅹ層　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂層で，中粒～極粗粒礫を少し含む。
第ⅩⅠ層　灰黄褐色(10YR4/2)礫質中粒砂層で，中粒～極粗粒礫を多く含む。
第ⅩⅡ層　黒褐色(10YR3/1)礫質中粒砂層で，中粒礫と炭化物を含む。
第ⅩⅢ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質細粒砂層で，中粒～極粗粒礫を多く含む。
第ⅩⅣ層　黒褐色(10YR3/1)礫質中粒砂層で，中粒礫を多く含む。
第ⅩⅤ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質中粒砂層で，細粒～中粒礫を多く含む。
第ⅩⅥ層　黒褐色(10YR3/1)礫質中粒砂層で，中粒礫を多く含む。
第ⅩⅦ層　黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒砂層で，中粒礫と中粒礫，マンガンを含み，締まる。
第ⅩⅧ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質中粒砂層で，細粒～中粒礫を多く含み，若干の粘性あり。
第ⅩⅨ層　灰黄褐色(10YR4/2)礫質中粒砂層で，多量の中粒礫とマンガンを含み，若干の粘性あり。
第ⅩⅩ層　黄灰色(2.5Y6/1)礫質中粒砂層で，中粒礫を含む。
第ⅩⅩⅠ層　褐灰色(10YR6/1)シルト質細粒砂層で，細粒礫を多く含む。
第ⅩⅩⅡ層　灰色(N6/)礫質粗粒砂層で，中粒～極粗粒礫と多量のマンガンを含む。
第ⅩⅩⅢ層　青灰色(5B5/1)シルト質極粗粒砂層で，中粒礫を僅かに含む。
第ⅩⅩⅣ層　褐灰色(7.5YR4/1)シルト層
第ⅩⅩⅤ層　灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂層
第ⅩⅩⅥ層　灰黄褐色(10YR5/2)礫質粗粒砂層で，中粒～極粗粒礫を含む。
第ⅩⅩⅦ層　にぶい黄橙色(10YR6/3)礫質中粒砂層
第ⅩⅩⅧ層　灰黄褐色(10YR6/2)礫質粗粒砂層で，中粒～粗粒礫を少し含む。
第ⅩⅩⅨ層　灰褐色(7.5YR5/2)礫質中粒砂層で，中粒～粗粒礫を含む。
第ⅩⅩⅩ層　褐灰色(5YR4/1)砂質礫層で，極粗粒砂と多量の中粒～粗粒礫，丸，亜礫を含む。
第ⅩⅩⅩⅠ層　灰黄褐色(10YR5/2)砂質礫層で，粗粒砂と多量の粗粒礫，黄灰色シルトのブロックを含む。
第ⅩⅩⅩⅡ層　灰黄褐色(10YR6/2)シルト層で，炭化物を含む。
第ⅩⅩⅩⅢ層　灰色(2.5Y7/2)砂質シルト層で，細粒礫を多く含む。
第ⅩⅩⅩⅣ層　褐灰色(10YR6/1)礫質粗粒砂層で，中粒礫を多く含む。
第ⅩⅩⅩⅤ層　黄灰色(2.5Y5/1)極粗粒砂層で，中粒礫を含む。
第ⅩⅩⅩⅥ層　青灰色(10BG6/1)細粒砂層
第ⅩⅩⅩⅦ層　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質礫層で，極粗粒砂と多量の粗粒礫，マンガンを含む。
第ⅩⅩⅩⅧ層　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質礫層で，極粗粒砂と多量の粗粒礫，マンガンを含む。
第ⅩⅩⅩⅨ層　褐灰色(10YR5/1)礫質極粗粒砂層で，中粒礫を含む。
遺構埋土
1. にぶい褐色(7.5YR5/3)礫質細粒砂で，中粒～極粗粒礫と炭化物，焼土を含む。

Fig.67　TR－13西壁セクション図

第Ⅳ～Ⅻ層は明治7年に堀の一部が埋められた際の埋土とみられ，南に傾斜する。第Ⅻ層は腐植を多く含み，また土留めに使用したとみられる杭列も検出している。

第Ⅻ～ⅩⅢ層は土手状遺構となっていた層で，第Ⅻ層は土壌化がみられ，第ⅩⅢ層は自然堆積層である。

第ⅩⅢ層以下は自然堆積層で，第ⅩⅢ・ⅩⅣ層は堀の底となっていた層である。

(2) 堆積層出土遺物

第ⅩⅩ層出土遺物

土師質土器(Fig.68－139)

139は椀で，底部の約1/4が残存し，底径6.0cmを測る。底部には断面三角形の高台が付く。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し，胎土はやや密で砂粒を多く含み，焼成は良好である。

Fig.68　TR－13出土遺物実測図(土師質土器)

(3)検出遺構

① 土手状遺構

トレンチ北端で検出した遺構で，第Ⅻ～ⅩⅢ層が人為的に削られ，土手状に残る。上部にはコンクリートの基礎が残っており，削平されたものとみられ，高さ0.80mが残存する。第Ⅻ層は土壌化し，古土壌であったとみられる。第Ⅻ～ⅩⅢ層の出土遺物は皆無であった。

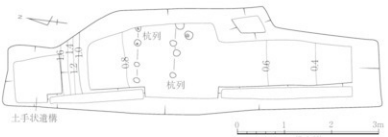


Fig.69　TR－13遺構平面図

② 杭列

第Ⅻ層中で検出した杭列で，土手状遺構に平行して東西方向に2列走る。検出長1.08mと1.26mを測り，その間は0.80mであった。杭は径約4㎝を測り，木材は松などの雑木で，腐って痕跡のみ残るものもあったが，長いものは残存長0.46mを測る。杭列は土留めとして使用されたものとみられる。

14. 瓦について

丸ノ内緑地からは多量の瓦が出土している。丸瓦，平瓦，桟瓦，軒丸瓦，軒平瓦，軒桟瓦が出土しており，特に平瓦と桟瓦が多くみられた。出土地点ではTR－4のSD－1，TR－6の瓦溜まり1での出土が目立つ。調整については，特に特徴があるものについてのみ文章中または観察表に記載する。また，丸瓦，軒丸瓦の凸面と平瓦，桟瓦，軒平瓦，軒桟瓦の調整はナデであった。

丸瓦は凹面にコビキAが残るものについては18点と少なく，布目痕や縄目痕が残るものもみられた。コビキBが残るものはほとんどのトレンチで出土している。また，79は19世紀の遺物と出土しているが，凹面はナデ調整で，筒部より玉縁部の径が大きいものもみられた。

Table.2　軒丸瓦観察表

図版番号	出土地点	文様	瓦当径(cm)	珠文数(推定)	瓦当等の特徴	凹面の特徴
140	TR－12　第Ⅻ層	三葉柏文	－	－		
141	表採	三巴文(右巻)	(16.2)	12	キラ粉	
142	TR－4　SD－1埋1	三巴文(右巻)	15.7	12	キラ粉	
143	TR－6　第Ⅻ層	三巴文(左巻)	(13.0)	0	ハナレ砂	コビキA
144	TR－5　SK－1	三巴文(左巻)	(14.8)	11残(18)	ハナレ砂	コビキA，布目圧痕
145	TR－13　第Ⅻ層	三巴文(左巻)	(13.6)	9残(14)		コビキB
146	TR－12　第Ⅻ層	三巴文(左巻)	15.2	16		コビキB
147	TR－13　第Ⅻ層	三巴文(左巻)	17.3	10残(11)		
148	TR－8　P－7	三巴文(左巻)	(14.8)	6残(12)	ハナレ砂	コビキB，布目圧痕
149	TR－4　SD－1埋2	三巴文(左巻)	14.4	16	キラ粉，木目痕	コビキB，布目圧痕
150	TR－2　第Ⅺ層	三巴文(左巻)	13.9	13	キラ粉	

Fig.70 軒瓦実測図

軒丸瓦では山内家の家紋である三葉柏文が1点出土している。140は三葉柏文の軒丸瓦で，瓦当の一部が出土しており，珠文の有無は不明である。三葉柏には葉脈が描かれる。軒丸瓦の大半は三巴文で，右巻きは少なく，左巻きがほとんどである。瓦当径や珠文数，巴尾の長さなどが様々で，10種類以上が確認できる。141・142は巴が右巻きで，珠文数は12で，キラ粉が付着する。143は巴が左巻きで，珠文がなく，高知城跡では初めてみられるものである。凹面にコビキAが残り，須恵質で炭素の吸着は認められない。144～150は巴が左巻きのものである。凹面にコビキAが残る144は珠文が小さく，推定珠文数は18である。145・146・148・149は凹面にコビキBが残るものである。145～148は胎土に砂粒を多く含んでいる。150は巴頭が非常に大きいもので，キラ粉が付着する。このタイプは今回の調査で多くみられたものである。

Table.3　軒平瓦観察表

図版番号	出土地点	中心飾り	瓦当高(cm)	文様区高(cm)	技法などの特徴	備考
151	表採	花文	5.2	3.1	「アキ」銘あり	
152	TR－4　SD－1埋2	三花文	3.8	2.3		
153	TR－6　SK－1	三花文	4.1	2.5		
154	TR－6　瓦溜まり1	三花文	4.7	3.1		
155	表採	三巴文(左巻)	4.3	2.6	キラ粉	軒桟瓦
156	TR－13　第Ⅶ層	三子葉文	4.2	3.0	ハナレ砂	
157	表採	三子葉文	4.1	2.4		
158	TR－4　第XV層	三子葉文	3.9	2.4		
159	TR－4　SD－1埋1	不明	4.3	2.8		
160	TR－6　第XIII層	橘状文	3.9	2.1		
161	TR－5　第XIX層	蔦文	3.9	2.0	ハナレ砂	

軒平瓦，軒桟瓦は本丸や三ノ丸，伝下屋敷跡で出土しているものとほぼ同様のものが出土している。151は花文を有し，今回の調査では2点のみ出土している。151の凹面には「アキ」銘がみられる。152～154は三花文を有する。このタイプはTR－4・6で出土し，中心飾りは雄蕊が肉厚の線分で表現されるものや，細い2本線で描かれるもの，花が大きく拡がるものなどがみられる。155は軒桟瓦で，中心飾りは三巴文である。このタイプはTR－4・6で出土し，キラ粉が付着するものや銘がみられるものがある。156～158は三子葉文を有する。三子葉文の中央が珠点で表されるものや，菱形を呈するものなどがみられる。このタイプはTR－4・9・11・13で出土し，近世前期の遺構であるTR－9のSK－1からも出土している。ハナレ砂が付着するものもみられる。159は花文のような文様がみられるもので，TR－4のSD－1より同様の文様のものが4点が出土している。160は橘状文を有するもので，1点のみの出土である。161は蔦文を有するもので，2点が出土している。胎土には砂粒を多く含んでいた。

銘については伝下屋敷や三ノ丸で出土しているものと同様のものが多く，今回初めて出土しているものが若干含まれる。推定生産地についてはこれまで高知城跡で出土しているものを参考としたが，不明なものも多い。今回出土したもので生産地が推定できるものとしては安芸市産が最も多く，次いで大阪府堺産であり，その他県内各地の生産地のものが少量みられる。安芸市産には「御瓦師」という銘が多くみられる。享保12年(1727)頃には安芸の五郎右衛門家が土佐藩の御瓦師になったようで，幕末には卯平が御瓦師になったとされる。今回出土している「アキ五」は五郎右衛門の可能性があり，さらに「御瓦師卯平」の銘もみられ，今回出土した刻銘瓦は18世紀後半から19世紀にかけてのものがみられる。この時期は今回の調査で遺構や遺物が多くみられた時期であり，また，瓦の出土量から見てもこの頃に瓦葺き建物が存在したことは間違いないであろう。

Table.4　出土瓦刻印表1

刻印(S＝1/2)	文字	器形・点数	推定生産地	刻印(S＝1/2)	文字	器形・点数	推定生産地
	アキ	軒平瓦　1点 丸瓦　5点 平瓦　5点 桟瓦　1点	高知県 安芸市		キ吉	平瓦　1点	高知県 安芸市
	アキ瓦	丸瓦　1点	〃		御用師卯平	平瓦　2点	〃
	アキ五	平瓦　2点	〃		御瓦師卯平	平瓦　1点	〃
	アキ正	平瓦　1点	〃		アキ卯平	桟瓦　1点	〃
	アキ五	軒平瓦　1点	〃		夜須文	平瓦　7点 桟瓦　1点	高知県 夜須町
	アキ友	軒桟瓦　1点 平瓦　1点	〃		徳常	軒桟瓦　13点	高知県 香我美町 徳王子
	アキ文	平瓦　1点	〃		片万	平瓦　1点	高知県 土佐山田町 片地
	アキ士	平瓦　1点	〃		片重	平瓦　1点	〃
	御瓦師	軒平瓦　1点 丸瓦　6点 平瓦　12点	〃		片長	平瓦　2点	〃
					片馬	平瓦　1点	〃

Table.5　出土瓦刻印表2

刻印(S＝1/2)	文字	器形・点数	推定生産地	刻印(S＝1/2)	文字	器形・点数	推定生産地
	片儀	軒桟瓦　1点 桟瓦　1点	高知県 土佐山田町 片地		布勇	平瓦　4点 桟瓦　1点	高知県 高知市 布師田
	中七	平瓦　1点	高知県 野市町 中山田か		布源	桟瓦　1点	〃
	中山林	桟瓦　1点	〃		鏡郷	平瓦　1点 桟瓦　1点	高知県 高知市 鏡か
	中負	平瓦　2点	〃		小津	桟瓦　1点	高知県 高知市 小津
	中□	平瓦　1点	〃		佐初	平瓦　1点 桟瓦　1点	高知県 佐川町か
	中月か	桟瓦　1点	〃		堺大小路	軒桟瓦　13点	大阪府 堺市
	中	軒丸瓦　1点 軒桟瓦　3点 丸瓦　2点 平瓦　8点 桟瓦　1点	〃		堺	丸瓦　22点	〃
	中□	平瓦　1点	〃		○	平瓦　1点 桟瓦　1点	〃
	クレタ八百	桟瓦　2点	高知県 南国市 久礼田		前久	桟瓦　2点	不明
	布寅	桟瓦　2点	高知県 高知市 布師田		山下	平瓦　1点	〃

Table.6　出土瓦刻印表3

刻印(S＝1/2)	文字	器形・点数	推定生産地	刻印(S＝1/2)	文字	器形・点数	推定生産地
	山亀	平瓦　1点	不明		□克	平瓦　4点	不明
	王兼	桟瓦　1点	〃		王□	軒平瓦　1点	〃
	西扉	桟瓦　1点	〃		右	桟瓦　1点	〃
	ウエ	丸瓦　1点	〃		安喜か	平瓦　1点	〃
	横濱か	平瓦　1点	〃		不明	平瓦　1点	〃
	□治	軒桟瓦　1点	〃		不明	平瓦　1点	〃
	津	軒平瓦　1点	〃		不明	丸瓦　2点 平瓦　1点	〃
	□菊	平瓦　1点	〃		不明	丸瓦　2点 桟瓦　1点	〃
	□□野角	軒平瓦　1点	〃		△	桟瓦　1点	〃
	寿□	丸瓦　1点	〃		不明	平瓦　1点	〃

第Ⅳ章　考察

1. 丸ノ内緑地の変遷

丸ノ内緑地における発掘調査は今回が初めてであり，これまで遺構の残存状況については不明であったため，今回の調査では非常に貴重な資料を得ることができた。丸ノ内緑地では近代から様々な建造物が建てられ，著しく撹乱を受けている部分もみられたが，幾度となく客土を盛って整地しており，下層の遺構の残存状態は良好であった。ここでは今回の成果を元に丸ノ内緑地の変遷を追ってみる。なお，今回の調査はトレンチ調査であり，上層で遺構が検出された場合は，上層の遺構を保存するため，下層の調査は行っておらず，部分的に検出された遺構や遺物での大まかな変遷である。

第Ⅰ期（近世以前）

遺物は少量であるが，古代の須恵器や瓦器片，東播系須恵器など13世紀の遺物，15世紀の青磁稜花皿が出土している。この時期の遺構は確認されていないが，江戸時代前期の遺構残存状態は非常に良好であり，下層には中世の遺構が存在する可能性が高い。

第Ⅱ期（～17世紀前半頃）

正保の城絵図[1]（1644～1647）や慶安４年（1651）の高知城古図[2]では「侍屋敷」という記述がみられる時期である。この屋敷は菅山集[3]に記載されている古図では「福岡丹波屋敷」と記述されている。福岡丹波は仕置役として元和改革に携わった人物である。[4]

検出されたこの時期の遺構としては，TR－5のSK－1，TR－6のSX－1，TR－8のSK－1，TR－9のSK－1などである。これらの遺構では初期伊万里や17世紀初頭の唐津焼や青花などが出土している。中でもTR－8の下層は遺構の密度が高く，ほとんどの遺構が客土を堅く締めた整地層の上で検出されており，大掛りな事業を行っていることからも「侍屋敷」の一部である可能性が高い。また，TR－8のSK－1では炭化物の堆積層がみられ，フイゴの羽口や鉄滓などが出土しており，鍛冶関連遺構とみられる。

また，TR－2・3で検出されたピット等の遺構は，遺物が細片であり時期の特定には至らなかったが，土手状遺構とほぼ同じ高さで検出されており，土手状遺構が築かれる以前または同様の時期と考えられ，第Ⅰ期または第Ⅱ期の遺構であるものとみられる。

第Ⅲ期（17世紀後葉頃）

寛文９年（1669）の高知城古図[5]では「御馬場六十六間」の記述がみられ，馬場として使用されていた時期である。この時期の明確な遺構は確認されておらず，遺物も少量である。

第Ⅳ期（18世紀頃）

宝永年間（1704～1710）の古絵図[6]では「侍屋敷跡」という記述がみられ，東西に長い建物が描かれている。この建物は明治６年の測量図[7]では「御厩」とされている。この時期の遺構は確認されておらず，遺物についても18世紀後半の遺物が少量が出土しているのみである。

第Ⅴ期（19世紀前半頃）

この時期の絵図は残っていないが，明治６年の測量図には「御厩」と書かれた東西に長い建物が描

かれているほか，その南には「馬場長七十九間半」の記述がみられる。この測量図は城内の建造物を取り壊す前に，寛永年間の図を元に旧記を付加記入して作成されたものであり，この時期に馬場が存在したかは定かではない。また，安政地震(1855)の際に藩主とその一族が避難するための仮御殿があったとされ，万延元年(1860)には取り除かれている。[30]

この時期の遺構はほぼ全域でみられた。検出された遺構はTR－4のSD－1やTR－6のSD－1，TR－7のSD－2など石組みの水路遺構があり，これらの遺構は最終的に埋没したのは幕末頃とみられる。TR－4のSD－1は石を3段積んでおり，高知城跡の水路遺構の中でも規模が大きく，TR－6やTR－7においても小規模な水路遺構が検出されていることからも，排水に力を注いでいたことが窺われる。また，TR－6では柱穴も確認している。

遺物ではこの時期のものが最も多く出土している。今回の調査の出土遺物では日用雑器が多くみられ，瓦についてもTR－4・6などで瓦溜まりや水路遺構に多量の瓦が廃棄されていた。遺物量の多さや排水に力を注いでいたことからも，この時期には何らかの建物が存在したものと考えられるが，明確な建物跡は確認されなかった。TR－6で確認された柱穴の位置から見ると厩である可能性がある。

第Ⅵ期(明治期)

明治期にはそれまであった建造物や土手が崩され，武徳館や高知県公会堂など様々な建造物が造られた。[31]

この時期の遺構はほぼ全域でみられるが，昭和期の撹乱を著しく受けていた。TR－4～9の調査地北部では瓦溜まりなどが確認されており，以前に瓦葺き建物が存在したものと考えられる。また，TR－8上層検出の石列はその位置より武徳館に伴うものであると思われる。

2. 土手状遺構について

正保の城絵図[29]には堀の内側に土手が描かれており，「土手高一間四尺」の記述がみられる。皆山集[32]においても「御城廻り土手ヲ皆石垣ニ被仰付度趣之御願　万治三年十一月　對州様より豊前守様へ被仰込候へとも右衛門有来之御修復之外御公裁無之趣也」という記載があり，1660年に土手を石垣に改修したいという願い出を出したが許可が下りなかったことが窺える。また，明治初年に撮影された高知城南西部の写真においても，石垣は築かれておらず土手になっていることから[32]，高知城跡の南側については当初から堀の石垣が存在しなかったものとみられる。その後，土手については明治7年頃に崩されている。堀についても絵図では堀の幅は南と東ともに12間(約24.0m)とされているが，明治7年には南側，昭和22年には東側の堀の一部が埋め立てられ[33]，現在では南が約14.6m，東が約16.0mとなっている。

今回の調査では4箇所で土手状遺構を検出した。土手状遺構は現在の堀の内側にあたる部分で確認され，堆積層を人為的に掘削して堀の肩を造ったものであり，TR－11・12では土手状遺構の裾部に護岸のためとみられる敷石も確認されている。絵図によると高さはおそらく約3.3mになると考えられるが，堀を埋める際に削平されたものとみられ，検出された遺構は残存状態が良好なものでも高さが1.24mであった。土手状遺構が確認されたのは，現在の堀の外側の石垣から約22mの地点で

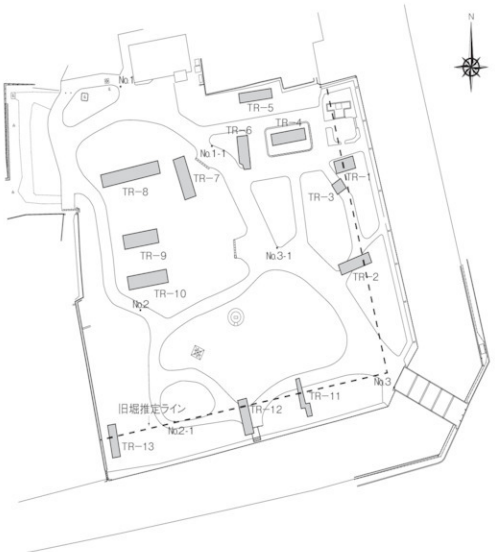


Fig.71　旧堀推定位置図(S＝1/1,000)

あり，これらの土手状遺構は絵図に描かれていた土手にあたるものとみられる。また，堀の外側のラインもほぼ当初の位置を保っているものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査で確認された遺構は，主に17世紀前半頃と19世紀前半頃の2時期である。17世紀前半の遺構については，特に丸ノ内緑地の北部で多く検出された。今回は部分的な調査であり，建物跡を確認することはできなかったが，遺構の密度も高く，建物の存在を充分に示唆するものであった。特に下層においては遺構の残存状態は良好であり，遺構が面的に拡がっているものと思われる。この時期の遺構は絵図に記述されている「侍屋敷」の一部である可能性が高いが，絵図によると「侍屋敷」の縁辺部にあたり，屋敷の中心は丸ノ内緑地の西側になるものと考えられる。

19世紀前半の遺構はほぼ全域でみられた。中でも石組みの水路遺構が目立ち，排水に力を注いでいたことが窺われる。この時期についても建物跡を確認することはできなかったが，排水に力を注いでいることや，柱穴が確認されていること，多量の瓦が廃棄されていること，日常雑器が多く出土

していることなどから生活の痕跡が窺われ，何らかの建物が存在したことは間違いないであろう。

また，18世紀頃については今回の調査では遺構が確認されておらず，出土遺物も極少量であり，ほとんど機能していなかったものと思われる。近世以前については遺構が確認されていないものの，古代，中世の遺物もわずかに出土している。これらの時期の状況については今後の調査で明らかにされることを期待したい。

土手状遺構については一部を確認したに過ぎないが，絵図に描かれていた土手を確認したことは非常に貴重な成果となった。また，土手状遺構を確認したことで当初の堀の位置を復元することもできた。土手状遺構は17世紀の前半にはすでに存在したものとみられるが，今回の調査ではその築かれた時期は特定できておらず，今後の課題としたい。

註

⑴ 国立公文書館所蔵（高知県教育委員会　1994『史跡高知城跡１－高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書－』所収）

⑵ 高知市民図書館蔵（⑴文献所収）

⑶ 1976『皆山集3』高知県立図書館

⑷ 横川末吉　1962『野中兼山』日本歴史学会編

⑸ (2)に同じ

⑹ 県民図書館蔵（⑴文献所収）

⑺ 高知城懐徳館蔵（⑴文献所収）

⑻ 山本淳　1927『土佐美術史』高知県教育会

⑼ 岩崎義郎　2001「丸ノ内緑地」『高知城を歩く』高知新聞社

⑽ (1)に同じ

⑾ (3)に同じ

1991『南路志第二巻』高知県立図書館

武市佐一郎　1931『高知公園史（稿）』（高知県教育委員会　1982『史跡高知城跡－保存管理計画策定報告書－』所収）

⑿ 土佐史談・高知県教育委員会編　2004『高知城下町読本』高知市

⒀ 高知県教育委員会　1982『史跡高知城跡－保存管理計画策定報告書－』

参考文献

高知県教育委員会　1994『史跡高知城跡１－高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書－』

㈱高知県文化財団埋蔵文化財センター　1995『高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集

㈱高知県文化財団埋蔵文化財センター　2001『高知城三ノ丸跡－石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書－』

㈱高知県文化財団埋蔵文化財センター　2002『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集

図 版

TR－1　南壁セクション（北東より）

TR－4　SD－1検出状態（東より）

TR－4　SD－1完掘状態(東より)

TR－6　SD－1完掘状態(東より)

TR－7　遺構完掘状態(北より)

TR－8　下層遺構完掘状態(東より)

TR－9　下層遺構完掘状態(東より)

TR－10　遺構完掘状態(西より)

TR－12　遺構完掘状態(南より)

TR－13　遺構完掘状態(南東より)

調査前風景1(南東より)

調査前風景2(北西より)

TR－2　遺構検出状態(東より)

TR－2　南壁セクション(北東より)

TR－3　遺構完掘状態(北より)

TR－3　北壁セクション（南西より)

TR－4　SD－1セクション(北より)

TR－4　SD－1陶器(10)出土状態(西より)

TR－4　石列1検出状態(南西より)

TR－4　北壁セクション(南より)

TR－5　遺構完掘状態(西より)

TR－5　SK－1(南より)

TR－5　SK－1遺物(23･24)出土状態(西より)

TR－5　北壁セクション(南東より)

TR－6　瓦溜まり1検出状態(北より)

TR－6　P－1礎板検出状態(東より)

TR－6　下層遺構完掘状態(北より)

TR－6　SX－1炭化物・鉄滓出土状態(北より)

TR－7　SD－1(北より)

TR－7　SD－1セクション(東より)

TR－7　SK－1セクション(西より)

TR－7　東壁セクション（西より)

TR－8　上層遺構検出状態(東より)

TR－8　石列1・2検出状態(北より)

TR－8　石列1・2セクション(西より)

TR－8　SK－1(南より)

TR－8　SK－1セクション(東より)

TR－8　SK－1土師質土器(90)出土状態(南より)

TR－8　SK－1遺物(105・107)出土状態(南より)

TR－8　P－2陶器(116)出土状態(西より)

TR－9　上層遺構検出状態(東より)

TR－9　南壁セクション(北東より)

TR－10　北壁セクション(南東より)

TR－11　SD－1(東より)

TR－11　土手状遺構検出状態1(南より)

TR－11　土手状遺構検出状態2(南より)

TR－12　杭出土状態(西より)

TR－12　土手状遺構検出状態（南東より）

TR－13　杭列検出状態(西より)

TR－13　土手状遺構検出状態(南より)

陶器(行平鍋)

陶器(土瓶)

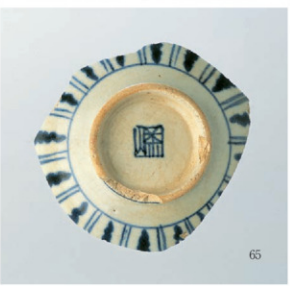
土製品（フイゴの羽口）

瓦（軒丸瓦）

49

53

58


65

140

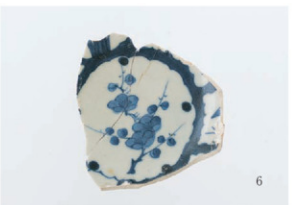
146

瓦質土器(火鉢),陶器(灯明受皿・火入れ),磁器(碗),瓦(軒丸瓦)

2

3

4


6

9

15

17

23

青花(碗),陶器(皿・擂鉢・行平鍋),磁器(皿・香炉)

24

26

32

48

51

52

54

55

土師質土器(焜炉),瀬戸焼(小皿),陶器(蓋),磁器(皿・小杯),土製品(焼台)

62

67

71

73

80

81

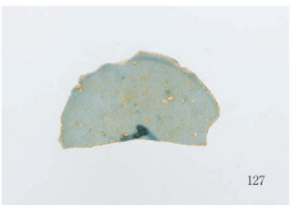
84

107

土師質土器(羽釜),陶器(皿),磁器(蓋・碗・皿)

111

117


127

132

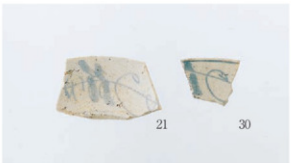
136

158

159

160

須恵器(杯)、青磁(皿)、陶器(甕・火鉢)、磁器(皿)、瓦(軒平瓦)



土師質土器(杯・皿・小皿),青花(皿),磁器(紅皿),土製品(泥面子)

93

95

97

98

105

113

120

131

135 138

152

東播系須恵器(片口鉢),土師質土器(杯・皿),瓦質土器(擂鉢),陶器(碗・皿),瓦(軒平瓦),古銭(聖栄元寶)

報告書抄録

ふりがな	しせき　こうちじょうせき
書名	史跡　高知城跡
副書名	丸ノ内緑地試掘確認調査報告書
巻次	
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第96集
編著者名	徳平涼子
編集機関	㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター
所在地	高知県南国市篠原南泉1437－1
発行年月日	2006年3月22日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
史跡高知城跡（しせきこうちじょうせき）	〒780-0850 高知県（こうちけん） 高知市（こうちし） 丸ノ内（まるのうち）	39201	010082	33° 33′ 26″	133° 31′ 60″	2005.5.16 ～ 2005.8.15	300㎡	パビリオン建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高知城跡	屋敷跡	近世	塀・柵列跡　1列 土坑　13基 溝跡　5条 水路遺構　4条 瓦溜まり　3基 石列　4列 土手状遺構　4基 杭列　10列 ピット　58個	須恵器 東播系須恵器 土師質土器 瓦質土器 近世陶磁器 古銭 土製品	江戸時代前期に遡る土坑や鍛冶関連遺構を確認した。江戸時代後期では石組みの水路遺構や瓦溜まり，柱穴などを検出した。また，現在の堀の周辺では土手状遺構を確認し，築城当初とみられる堀のラインを復元できた。

本書作成データ
ハ ー ド：PowerMacG5/2.0dual，PowerBookG4/1.5，iBookG4/1.2
システム：MacOS X（10.3.9）
ソ フ ト：JeditX，Adobe Photoshop®8.0.1，Adobe Illustrator®11.0.1，Adobe Indesign®3.0.1 など
フォント：モリサワOTF基本7書体，ヒラギノ角ゴProW6，Times Italic
プリンタ：Xerox Docu Print C3530（文書校正）
デ ー タ：図版以外はすべてデジタルデータで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第96集

史跡　高知城跡

丸ノ内緑地試掘確認調査発掘調査報告書

2006年3月22日

発行　財高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437－1
Tel. 088-864-0671

印刷　共和印刷株式会社